みらいつくり

第18回 読書会 @Zoom

【日時】
2020年12月14日(月)16:00～17:00

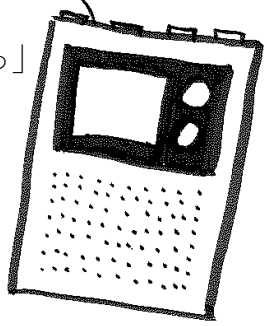
【課題図書】
ディケンズ『クリスマス・キャロル』

【参加方法】
興味のある方は、以下事務局までご連絡ください。
zoomのアドレスとパスワードを添付して返信いたします。

事務局：みらいつくり研究所　松井
Eメール：matsui-ka@kjnet.onmicrosoft.com

「ラジオ参加」も大歓迎！

「ちょっと議論には加われない」「その時間は作業しているから」
そんなみなさんにおすすめの「ラジオ参加」。
zoomのカメラをオフにして、ラジオみたいに聞き流す。
そんな「学び」があっていい。そんな「参加」があっていい。
興味のある方はぜひ事務局にお問い合わせください。



みらいつくり大学校企画

みらいつくり大学校企画

第 18 回みらいつくり読書会@zoom 記録

第 19 回は、2021/1/4 の 16:00～17:00 に行います。興味のある方は下記事務局までご連絡ください。

事務局 みらいつくり研究所 松井

E メール：matsui-ka@kjnet.onmicrosoft.com

【課題図書】	【実施日時】	【参加者】
ディケンズ『クリスマス・キャロル』	2020/12/14 16:00～17:00	A,B,C,D(＋ラジオ参加 1 名)

内容（※語尾を中心に編集しています）

A：今日は『クリスマス・キャロル』ですね。みなさんの周りではクリスマス感は増してきていますか？

B：クリスマスツリーを出したりしていますよね。

C：うちは、音楽プレイヤーを 10 何年ぶりに変えたんです。スマホと連動できるものにしたので、ずっとクリスマスカフェ BGM がかかっています。

A：そうなるとだいぶ高まってきていますね。

C：高まっています。

B：C さんの家のクリスマスツリーはいいですもんね。あれはすばらしいですね。

C：毎年 3 月くらいまで出しています。年の半分くらいは…。

A：今回はみなさんどの訳を読んだでしょうか。

C：訳はどのくらいの種類があるんでしょうか。

A：私の調べによると 3 つくらいあるようでした。

C：３つありますか。僕はこれを読みました。村岡花子さんが訳したものです。これは『花子とアン』の花子さんですよね。

A：そうと思います。

C：『赤毛のアン』の訳者ですよね。

A：私は、C さんがそれを読むと話していたので、別のものにしようと思って、中川さんの訳を読みました。集英社から出ています。酒井駒子さんの表紙がついていました。

C：誰ですか？

A：『ビロードのうさぎ』という絵本が有名でしょうか。その方が表紙を書いています。

D：へ～。柔らかい感じ。

C：調べてみると、たくさんありそうですね。

A：私が見たのは 3 つでした。

C：光文社古典新訳文庫からも出たんですね。

A：集英社、光文社古典新訳文庫、そして C さんが読んだのは新潮文庫ですよね？

C：僕のは新潮文庫です。

A：その 3 つかなと思っていました。

C：光文社古典新訳文庫は、時々全然良くない訳がありますよね。論争になるくらい…。どの作品だっ

たかな…。
A：なんだか攻めた訳をしているイメージがあります。
C：『若草物語』を読んだんだけど、無理と思いました。誰が喋っているかわからなくなってしまいました。
B：ふーん。
C：そういうこだわりにしたのかもしれません。でも、誰の台詞かがわからなくなってしまったんですよね。
A：そういえば、古典新訳文庫の…『文学こそ最高の教養である』という本を買いました。
C：手に取ったけど買いませんでした。買ったんですね。
A：読書会にいいかなーと思ったんですよね。特にアフリカ文学のおすすめが載っていたので、買ってみました。
C：『崩れゆく絆』でしたっけ？
A：そうですね。全然私たちが読もうとしている作品とは違うんだなと思って…。
C：やし酒？
A：そう、『やし酒飲み』は載っていません。
C：多分それは入りませんね。
C：D さんは得意の岩波少年文庫ですか？
D：それが、今回は別の得意な青空文庫でした。
B：青空文庫にあるんですね。
C：そうなんだ。
D：ありました。でもすごく古い訳でした。第二の妖精でくじけました。
A：妖精なんだ…。
D：精霊でした。
B：幽霊じゃないんですか？
D：幽霊じゃなくて精霊と訳されていました。
C：ほ～。
B：なんだろう、ゴーストなのかな…。
D：すごく訳が古くて、ディズニーの『クリスマス・キャロル』は家にあるので、観ていたので、忠実に書いてあるなと思いました。
A：B さんは新潮文庫ですか？
B：僕は岩波少年文庫を読みました。図書館で結構借りられていたんですよ。こういう時期だから。そしてあまり人気のないであろうものが残っているから…。
C：人気ないんだ。
A：人気ありそうだけど。
B：多分人気ないと思います。だって残っていたから。確かに古い感じはしました。訳の調子というか。
C：何ページくらいありますか？
B：手元にないのでわからないのですが、200 弱のイメージです。
C：へ～。そうなると珍しく全員違う訳で読んだんですね。

A：そうですね。
C：もう一つ、なんとかけいいちろうさんという人が訳しているものがありそうですね。これだけちょっと値段が高いです。なんででしょうか…。
A：字がすごくでかいとかいうことじゃないでしょうか。
D：ははは。
B：あれはすごかったですね。
C：アメリカ版の挿絵が入っているとあります。絵本に近いのかもしれません。解説が後ろに３７ページついているようです。そういうことみたいです。
A：私の読んだ集英社も、巻末の解説が多く見えたんですよね。
C：解説多いんですか？
A：少なくとも新潮よりは多かったんです。
C：新潮文庫は２ページでおしまいです。村岡さんが書いています。ほぼないに等しいですね。
A：感想を話していきましょうか。
A：そういえば今日は黒板がないんです。緑を塗り直してくれています。
A：私は読んで楽しかったです。過去の精霊が出てきたあたりから、次はこうなるよな、と想像しながら読みました。解説で中川さんが書いていたのは、ディケンズは作品に子どものころの自分を投影させていたということでした。『クリスマス・キャロル』には、運命への反抗、人間のつくった制度への批判、それらが含まれていると書いてありました。子どもがテーマになることが多いけれど、それは、子どもの置かれている環境がいつの時代でも逆境で、不条理の中にあるからだ、ともありました。子どもたちには可能性がある、そんな主張があるようです。特に、当時のイギリスの児童労働の問題に関する批判も含まれています。よく児童労働の問題について書かれたり映画などで描かれたりするとき、靴墨工場が出てきます。ディケンズ自身も靴墨工場で働いていた経験があって学校にもしっかりは通っていなかったようです。過去の精霊とのやりとりの中で、一瞬、学校が出てきます。でもその書かれ方は良いものではありません。その悲惨さも描いていると書いていました。「いつの時代も子どもが逆境に置かれる」というのは確かだな、と思いました。新自由主義的な学校のあり方においても子どもは悲鳴を上げているだろうし、コロナの時代における学校においても子どもたちの状況を想像すると大変だろうと思います。この本を読み終えて、ディケンズはそんな子どもの現実とクリスマスを結び付けて物語にしたんだなと思いました。仕事頑張ろうと思いました。そんな感想です。
D：最初にディズニーの『クリスマス・キャロル』を観た時にはわかりやすい話だなと思いました。悪い人が改心する話です。自分の生い立ちを振り返りながら未来を見ていきます。今回青空文庫で読みましたが、映像で楽しみたいなと思うシーンが多かったです。青空文庫の表現が難しいからなのかもしれませんが、まず第一の精霊が頭に何かをつけているのがよくわからなかった。この漢字どうやって読むんだっけ？と思いながらでした。表現や漢字が難しかったので映像で見たいと思いました。エンターテイメントとして楽しめる映画だと思いつつ、昔の時代って子どもが悲惨な状況に置かれています。女性に対してもそうです。そうかと思いつつ、この話がクリスマスである必要ってあるのかな…と考えました。ヨーロッパではクリスマスを大切にしていて、人間が変わる日なんだろうとは想像しましたが。いろいろ考えましたが、幸せが一番ということでしょうか。
A：クリスマスじゃないと成り立たないんじゃないですか？

D：本当？そうかな。
C：僕は、全然面白くなかったです。最近読んでいる他の本とのギャプが大きかったのか、いつかどこかで面白くなるでしょうと思いながら読んだんですけど、ついに最後まで面白くはなかったです。何ででしょう。1800 年代の半ばですよね。時代的にはヴィクトリア朝とかいうらしいんですけど。この辺りで小説が文学表現の中心となってくるらしいです。寓話ではあるけれど、ストーリーをあまりにもわかりやすくしすぎていると思いました。第 1、第 2、第 3 というようにです。何となくうーんと思いました。文章の書き方では、時々人間じゃないものが擬人化されています。そんな表現がありましたよね。今まで読んでいた作品ではそういう表現が少なかったので、最初はおおっと思いました。そんな表現が多くなかったですか？擬人化表現が。若干邪魔くさい感じもしました。
B：「ドアノブのように死んでいる…」というような表現でしょうか。
C：それはドアノブに例えたんだけど、まるで物が人になったかのような表現が多かった気がするんです。
B：イギリスの文学の伝統…というようなことをディケンズ自身が書いていましたよね。「ドアノブのように、と書くことを許して欲しい」というように書いています。イギリスの文学の癖なんだ…とか。C.S ルイスの『ナルニア国物語』も比喩表現が多いですよね。やはり似ているなと思いました。ルイスがディケンズを踏襲しているんだとは思いますが。時代でいうと。
C：ちなみに、幽霊は三つ、三人いますよね。三つに試されて変わっていくと聞くと、「荒野の試み」をどうしても想像してしまいます。関係ないのでしょうか。
B：そういうこともあるだろうと思います。この話全体が「ザアカイの物語」の再解釈として捉えることができると思いました。福音書に書かれている話です。「金持ちとラザロ」の再解釈とも取れると思っています。なので、わりかしキリスト教的な話法に沿った物語方だと思いました。
C：障害のあるお子さんを出してくる感じ、結局は死ななかったんですよね。幻で見せられたけれど、スクルージが改心したから変わったんだということなのでしょうか。でも、本当は死んでいなかったと書いてあります。確かに最後の幽霊のシーンで、子どもが死んだということはわかりにくいんですよね。ティム坊はいないんだね…というくらい。ティム坊が死ぬシーンはないし、誰かがそれを語りもしない。読者が「いないのかな」とわかるように書かれているくらいで、本当は死んでいなかったということを言いたいのか…。その辺りがわからなかったです。最後の方は、スクルージに関して教訓めいているというか「お前こんなことをしていたらこんな死に方するぞ」「だから改心しなさい」、それってどうなんだろうって思いました。所々、この文章面白いなと思うところには折り目をつけながら読んだんですけど…。その辺りは時間があれば共有します。
B：僕は好きでした。お説教くさいといえばそうなんですけど、それは僕らがそういうものを聞きすぎているというものあるし、日本昔ばなしとかにも通じますよね。こぶとり爺さんみたいに。お説教くさいといえばそうですけど、キリスト教的な精神という意味では、ザアカイ的でもあるし金持ちとラザロのような話でもあります。それらがクリスマスというキリスト教的な時期やイベントとからめられているのがその通りだと思いました。あとがきが面白かったです。この作品が書かれた時期というのが、マルクスが資本論を書いたイギリスなんですよね。ちょうどその時期らしいです。マルクスが大英図書館にこもっていた時に、ディケンズはクリスマスキャロルを書いています。この時期って、産業革命によって、社会が資本家と労働者という二つの階級に分裂した時期です。そしてディケンズ

自身が父親の借金が払えずに監獄生活をしたことがあると書いていました。つまり労働者階級の辛酸を舐めた経験のある人物なんです。スクルージというのは資本家階級ですよね。その階級の分断というのを文学で縫い合わせようとしていたのかなと僕は類推しているんです。あとがきにはジョン・ウェスレーのことが書かれていました。1700 年代にフランス革命が起きるじゃないですか。イギリスでは、労働者が王政を倒さなかった、つまり王様をギロチンにかけずに済んだ。それは、ウェスレーとかの働きが大きかったとも書かれていました。ウェスレーって、この時期なのかな？正確に把握はできていないんだけれど、1800 年代後半だと思います。ウェスレーはキリスト教的な道徳に基づいて生きようぜと言った人です。労働者は真面目に働こうぜ、資本家はほどこそうぜ、と言った人です。そういうものがあったから、イギリスはフランス革命にまでは至らなかったという分析をする人もいるようです。ディケンズの『クリスマス・キャロル』はある種のウェスレー的なキリスト教精神の復古主義的な働きなのではないかということでした。ディケンズは、マルクスとは違うルートで、資本主義というものの矛盾を何とかならないかと考えた人なのかなと思って、僕は好きかなと思いました。話が薄っぺらいとか言い始めると、多分書いている人が読者をどこに想定しているかという問題にもなってきます。童話としてはこのくらいなんじゃないかなと思います。そんな感じでした。

A：お互いの話から考えたこと話せればと思います。C さんが言っていた子どもが死んだかわからないという話題がありました。それに関わって思ったことがあります。私の読んだ訳だと、マーレイだけ亡霊と書かれています。それ以外は精霊と書かれています。三番目の精霊は子どもが死んだかどうかについてははっきりと言いませんが、自分自身が未来の精霊であることも言わないですよね。はっきりしない。

C：マーレイから言われたんじゃなかったでしたっけ？最初に。

A：そうでしたっけ？

C：スクルージが「あなたが未来の幽霊ですか？」と聞いています。

A：過去、現在、と来たから、次は未来だろうと考えたのかと思っていました。

C：ふーん。そうかもしれない。

A：おそらく未来であろう精霊は、全く自分自身のことは語りません。その辺りの書き方は面白いなとも思いました。

B：あー。一つだけ異質だということですね。

C：最後の精霊が語ることだけは事実じゃないということですか？

A：そういうことでもあります。

C：このままいくとこうなるぞということか。だから本当はティムが死んでいなかった、ということですね。

A：また、荒野の試みに似ているというのは、私もそう思いました。特に現在の精霊のスクルージに対する関わり方からそう感じました。海に行ったり、荒野に行ったり、飛んで行きますよね。その感じが聖書の記述を思わせるなと感じました。

B：『神曲』とかも意識されているでしょうか。

C：ダンテですね。

B：そうです。『神曲』は 1400 年代ですからね。イタリアはカトリックですし、イギリスは英国国教会なので、伝統も違うのかもしれませんが、影響があるように思いました。『神曲』って、ある人が煉獄

というこの世とあの世の間にある場所に連れて行かれて、そこには今の世界では活躍しているけれど地獄で苦しんでいる人がいたりするのを見ます。そこには時事ネタも含まれています。イタリアで有名な金持ちが苦しんでいる様子が書かれています。その辺りの周辺知識がないとわからなかったりします。
C：昔の話は書かれていますよね。古代ギリシャとか。
B：そうですね。古代ギリシャの詩人とかが出てきますよね。
C：オデュッセウスとか。
B：ウェルギリウスとか。これがダンテの地獄巡りを導く人で…とか。そういう時代、色々な人たちがパロディ的に出てくるんです。その時に生きていた人たちも煉獄にいるのが書かれていたんです。その時の国会議員的な人がいたりするんですね。今でいうと「私が横を見ると麻生太郎が苦しんでいた」というようなことですよね。
C：麻生太郎の幽霊という感じなんですね。
B：だから『神曲』って面白いんです。それで、このスクルージの話には、煉獄感があるんですよね。時間というものを超越した、そんな世界から見たときに、自分の人生っていったい何なんだろうと考える、というようなことです。チクセントミハイが言っていましたが、ダンテの『神曲』って「中年の危機」として読めるらしいんです。そんな説があります。中年の危機の話なんだというのが、チクセントミハイの解釈なんです。実際に「中年の危機」に関わる大学講座があって、そこで『神曲』を教材にして話したらしいです。誰が共感してくれるかなと思っていたら、大好評だったと書いていました。やっぱり『神曲』は中年の危機だったと確信を得たらしいです。
D：「中年の危機」ってなんですか？
B：「中年の危機」というのは、年代はいろいろ言われるけれど、ライフステージが変わるときに、人が「人生ってなんだったんだろう」とか考える、という心理学用語です。そういう時期にある人たちはうつ病っぽくなってしまったりします。自殺する人がいたりとかそんな問題もあります。特定の年齢は気をつけなきゃね、ということですよね。今で言うと 40 歳というのは気をつけなくてはいけないと言われていますよね。あとは定年退職の時とかもそうですよね。スクルージはだいぶ歳は上ですけど、中年の危機問題とかも入っていそうだと思いました。
A：難しいなと思ったところがありました。現在の精霊が語っている場面で、最後に男の子と女の子が出てきます。「無知」という名前の男の子と、「絶望」という名前の女の子です。これがわからなかったんです。色々なものを見て回って、帰ってきたときに会うんですけど。
C：ありました。そして男の子の下に、「滅亡」とあらわれるんですよね。
A：私の読んだものでは「破滅」と書いていました。
C：あったね。誰の子どもなんでしたっけ？
A：服の中にいたんですよね。
C：男の子、女の子、に例えているけれど、いわゆる人間の本質っていうことなんでしょうか。
A：そうなんでしょうか。
C：それを幽霊に見せられるんだけれど、スクルージはもう改心しかけているから「この子どもたちには救われる場所も救ってあげる人もいないのですか」と聞きます。そして幽霊は「監獄はないのかね」と答えます。これはスクルージが最初に言っている言葉です。「そんな子どもは監獄や救貧院に入れた

らいいじゃないか」と。お前の言っているその子どもは、人間の本質なんだということなんだと思います。だからお前だってそういう運命だよということを言いたんだと思います。そして最後の幽霊に繋がっていく。
A：そっか。
C：だから男の子と女の子であるということにはあまり意味がない。例えているということなんじゃないかと思います。そのギャップにぎょっとさせようとしているんじゃないかな。
A：そういうものをスクルージに見せた、ということですね。
C：そして最後に「死」が出てきますよね。最後の幽霊のところで。「死」の描写ってすごいですよね。
A：どんなんでしたっけ？
C：最後の幽霊ってめちゃ怖いじゃないですか。
A：怖いです。
C：目も見えません。しゃべりもしない。途中で、死に対していろいろと言います。死んでいる自分をみて、霊の声が聞こえてきたというようなシーンです。ハイデガーじゃないけれど、将来の最終段階は死ですよね。それをみて怯えるというか、それがとどめのように書かれています。
A：最後の精霊に関しても、絵にできないと思います。映像化はどうやっているんだろうと思いました。最初の精霊も「子どものようで老人のよう」とかありますよね。変な書き方です。どうやって映像化するんだろうと思いました。
C：一番映像化が想像できたのは、鼻にたんこぶのついた男でした。
A：誰でしたっけ？
C：鼻にこぶが垂れている男っていましたよね。あいつ絶対映像化されていると思いました。
A：あーそれ。こちらの訳では変わった表現になっていたんですよね。
C：そうなんだ。
A：その辺りも面白かったです。
D：映画は 1980 年代と 1990 年代とあって、なおかつミュージカルでは市村正親さんが演じているようなんです。それはすごく面白そうだなと思いました。近年のミュージカルではホリエモンがやっているらしいです。
C：なんだそれ。
B：なにそれ。
D：スクルージなのか、プロデューサーなのかわかりませんが、『クリスマス・キャロル』の公演に関わっているようです。
C：いわゆるホリエモンは守銭奴みたいに言われていましたよね。そこを逆手にとっているんでしょうか。見た目もスクルージっぽくはないけれどあえてなんでしょうか。
D：今年のやつもチケットがまだありました。
B：知らなかったですね。
C：ディケンズの他の作品を読んだことありますか？
A：私はないです。
B：僕はこれだけですね。
C：僕は昔買って読もうとしましたが諦めました。この少し前の世代に小説といえば「三巻本」といっ

て、厚い豪華な装丁のものを指していたようなんです。そんなものは庶民は買えないから、読むことができなかった。当時はそれを貸本屋が買って色々な人に貸すというビジネスをしていたんですって。だから貸本屋が作者にああすれこうすれという意見を言えるくらい力を持っていたらしいんです。そこでディケンズはすごく短い本を書いた。かつこの頃に雑誌という形態が出始めたらしいんですよ。雑誌に差し込む短い話としてディケンズがいくつか書いて爆発的に売れたということなんですね。安いから買えたらしいんです。
A：さらに分冊をして雑誌に載せていたと書いていました。
C：いわゆる連載ですよね。
A：連載で初めて多くの人が読めるようになった。
C：なるほど。ディケンズ、僕はだめでしたね。
B：C.S ルイスとかもあまりはまらないですか？
C：C.S ルイスは『ロード・オブ・ザ・リング』でしたか？
B：『ナルニア国物語』ですね。
C：ああいうファンタジーって長くて無理ですね。
B：僕はナルニアも同じ系譜っぽいと思うんですよね。それは文体だけではなくて、ナルニアという国に少年たちが行くことによって、ひん曲がった従兄弟のやつとかが真っ直ぐになったりすんですよね。アスランというライオンに出会って。なんかそういう感じが、イギリス文学の一つの型なのか…。
C：（ラジオ参加の方が）ナルニアが好きとチャットに書いてくれていますね。ナルニアはライオンがイエス・キリストなんですよね。ナルニアと比較していいのかわかりませんが、『ロード・オブ・ザ・リング』の方が好きですね。
B：はいはい。全然違いますよね。
C：そもそも『指輪物語』にははじめに『ホビットの冒険』があって、ずっとホビット族の説明なんかをしていますよね。それが中心になる話ですよね。『ナルニア国物語』にはそれがないですよね。いわゆる寓話性というか。
B：そうですね。
C：わかった。だから世界観というものをどれほど重視しているか、キャラクターを重視しているか、という違いなんだと思います。ディケンズの頃ってキャラクターがどう変わっていくかにシフトしていった時代なんだと思います。その前はキャラクターというよりはまず世界観があって、その中でキャラクターが動いているという発想なんじゃないでしょうか。世界観がなくてもキャラクターが何人かいれば成り立ってしまう。キャラクターを、当時のイギリスにポンと置いて小説もできてしまう。僕は、それらよりは世界観がある方が好きなんだと思います。
B：そうですね。それは作風の好みですね。そういえば、ルイスとトールキンは親友だったんですよね。毎週木曜日にはパブで飲んでいて。トールキンがもう諦めそうになっていたらしいんですよ。『指輪物語』を完成できない、と。そこで「君なら絶対できるよ」と言い続けたのがルイスだった。トールキンは完璧主義すぎて、『指輪物語』の舞台となる世界、その世界の歴史書や辞書や文化を書いているんですよね。自分で。小説には出てこないんですよ。そんなことをしていたら、舞台設定だけで 10 年かかってしまったんですって。本編 1 行もかけていないのに。こりゃだめだ、俺は死ぬな、と思って。
A：無理だと思ったんですよね。

B：そう、無理だ！と思って書いたのが『ニグルの木の葉』という短編なんです。それが泣けるんです。
A：めちゃいいんですよね～。
D：へ～。知らない。
B：泣けるんですよ。
C：トールキンの何？
B：『ニグルの木の葉』です。
A：『妖精物語について』という本に集録されているはずですよね。
B：僕も全集みたいなものをかりて読んだんです。
A：そう、全集みたいなやつにしか入っていないんです。私もどこかにあったはず…。
B：ものの数ページしかないはずです。
D：すぐ読める感じの。
C：『妖精物語について』ですね。知らなかったです。でも、その 100 年後に映画化した際、最後までいけたのは『指輪物語』で、最後までいかなかったのが『ナルニア国物語』なんですね。
B：皮肉なことにね。対象年齢が違うんでしょうね。『指輪物語』は深いじゃないですか。指輪って罪ですよね。あれを持っていられるのは弱きものだけなんだというのは思想性が強いんだけど…。
D：なんで罪を弱いものが持っていられるんですか？
C：弱さを自覚するということの大事さを言っているんですよね。
B：ホビットではない、力をもった種族がそれを持つとそれの虜になってしまうんですよね。
C：主人公がどんどんやられていく感じ。第三話になるともう何もやっていない。でも完全に指輪の虜になってしまって、最後の最後に、主人公の昔からの友達ででぶった人がいるんだけど、そいつが大活躍するところで泣けるんですよね。脇役としか思っていなかった奴が最後の最後で…。主人公はほぼやられているだけです。
A：久々に『指輪物語』を読みたくなってきました。
D：私も観たくなってきた。
C：A くんは観たくなるじゃなくて読みたくなるんだ。
A：僕は読みたいですね。
B：スメアゴルっているじゃないですか。正気の時には「ご主人さま、仕えるでございますよ」なんて言っている感じなんだけど、夜になると目がいっちゃって、ついつい殺そうとしてしまう。もう分裂病、分裂していらっしゃるじゃないですか。
A：いわゆるね。
B：でも、彼が最後に一番大事なことをするんです。そういうのって、人間社会でもあるじゃないですか。職場で、なんでこの人いるんだろうって人が、実は大事だったり。そんな話でもあります。そういう意味ではトールキンの方が深いと思う。でも僕はナルニアもめちゃめちゃ好きですよ。何回でも読めます。僕の中の古典ですね。特に三巻と七巻が面白い。
A：私も大好きです。大人になっても読み返したのは『ナルニア国物語』でした。小学生の時に『ホビット』を読みましたが、それ以降は読んでいないから、ほとんど覚えていません。また読んでみたいですね。
A：年末年始にかけて読みたい本についても話したいんですけどいかがですか？

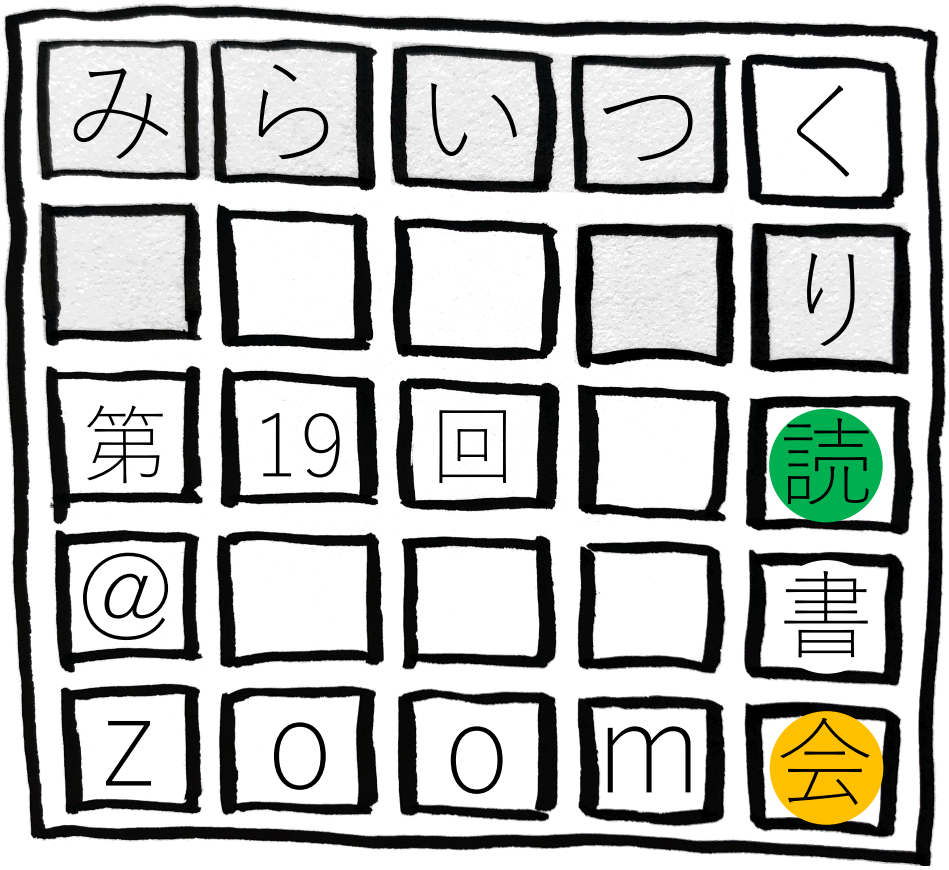
C：僕は絶対に主張したいんですけど『ガリヴァー旅行記』ですね。
D：『ガリヴァー旅行記』、言っていましたね。
C：絶対読んでほしいんですよ。
B：『ガリヴァー旅行記』は長いって言っていましたっけ？
C：430 ページくらいですね。文字も小さい。
D：アフリカには行かないでアメリカに行っちゃう？
C：年末年始だから長いのをと話していましたよね。『やし酒飲み』は短いから。みなさん『ガリヴァー旅行記』読んでいないでしょ。『ガリヴァー旅行記』は絶対読んでいただきたい。本当は『ドン・キホーテ』なんですけど長すぎるから。6 冊ありますから。『ガリヴァー旅行記』は少年版もあるじゃないですか。
D：岩波少年文庫。
C：予想通り D さんは子ども版でもいいですよ。
D：大好きな子ども版。
B：映画もありますよね。
D：ばっちりじゃないですか！
C：大人版がいいんですよ。
B：青空もありますね。
C：青空もあるんだ。でも古いですよね。
B：古そうです。C さんが言っているのはどのやつですか？
C：僕のは岩波文庫です。平井正穂さんが訳しています。この方は色々とイギリス文学を訳しているんですが、この人の文章はすごくいいんです。岩波はすごくおすすめです。岩波、訳がちょっとと思うこともあるんですが、これはおすすめです。４つあるんです。第 1 第 2 が小人の国なんです。いわゆるガリヴァー旅行記です。そして第 3 がラピュタ。天空の島に行くんです。
B：元ネタなんですよね。多分。
D：ぽいですね。
C：そこに色々な研究所があって、研究をしています。それがとことん意味のわからないものなんですが、真剣に研究をしているんです。最後が馬の国に行く。そこでは野蛮な人間というのと馬が逆転しているんです。野蛮な人間は言葉もしゃべれなければ、他の人を蹴落としても自分だけは食べ物を得たいというような、それが「ヤフー」なんです。Yahoo! JAPAN のヤフーはそこから来ているみたいです。
D：え！
C：知らないでしょ。ネットでわーっと探すことを言っているのか、わからないけど。
B：そういうことか。
C：そしてガリヴァーが 4 つの国を旅して、帰ってきて、どう変わるかという話です。尋常じゃない話です。なんで今までこれを知らなかったんだ、と思いました。
B：これはどこの国の作家なんですか？
C：この人はアイルランドなんですよね。
B：へー。アイルランド。『オズの魔法使い』も面白いですよね。いつだか読みました。10 年近く前で

した。あれは読むと本当に面白いです。よーく考えられているのがわかります。
C：『オズの魔法使い』はもっと前でしょうか。
B：『オズの魔法使い』はアメリカですから。カンザス州ですからね。竜巻ですから。
C：『ガリヴァー旅行記』は 1900 年のはじめですから、シャイクスピアのちょっとあとなんです。
B：超古いんですね。
D：へ～。私、古くないんですけど、『フェルマーの最終定理』って本があって読みたいと思っているんです。
B：あれはめちゃ面白いですよ。
D：すごく読みたいと思っていて。
B：あれは人生ベスト 10 に入る面白さだと思っています。
D：私、数学は好きじゃないんですけど、よくわからないんですけど、数学界最大の難問があって、それが三世紀にわたって解読されたという話です。そういうのって解読できるんだ！と思って。
C：小説なの？
B：フィクションじゃないです。ノンフィクション。だから、サイエンスライターなんですよ。
D：でも人間ドラマって書いてあるから。
B：数式をほぼ使わずに、数学的概念を読者に伝えることに成功しています。もう天才だと思いますね。サイモン・シンは。
D：読みたい！と思って。
B：日本人の数学者で志村という人がいて、その人が一番重要な役割を果たしているんです。その人はプリンストン大学にいて、僕の弟はその志村さんに会ったことがあるんです。数学界では伝説の人で。フェルマーの定理で一番重要な一つのステップを前に進めたのがその人なんです。
C：面白そうではあるけど…。
B：ちょっと文学とは違うかなと思います。めちゃくちゃ面白いのは保証します。
A：私は、『失われた時を求めて』の第一巻を読む、というのはどうかなと考えていました。
C：そこにいっちゃうとすごいことになりますよ。
B：面白いんだろうなぁ。
A：それか、ちょっと戻るけれど『罪と罰』です。
D：ドストエフスキー。
A：読書会とうたって本になっているものがあります。有名な作家さんたちが『罪と罰』を読まないで座談会をして、そこで予想をしながら話す、という本がありました。そんな企画の本を読んだんですけど『罪と罰』は読んでおいた方がいいなと思ったんです。
B：僕は『オズの魔法使い』とかかな。さっき言ったように。面白いだろうなと思いますし。『ガリヴァー旅行記』には興味がありますね。『ドン・キホーテ』も興味があります。ホセ・ムヒカっているじゃないですか。世界一貧しい大統領。その人の本で、人生の座右の書の一つにあげていたんです。真っ先にあげていたんですよね。
C：『ドン・キホーテ』ね。歴史上の世界のベスト 50 とかで一位になるのは大体『ドン・キホーテ』なんですよね。
D：すごい。

C：そして『ガリヴァー旅行記』も大体入っている。
A：やはり『ドン・キホーテ』は難しいんですか？
C：難しいというか、6 冊ありますからね。
D：長い。第三巻だけとか。
A：それだと話がわからないですよね。
B：あと、次回を来年くらいにする、というなら…。
C：ただ、こないだ本屋さんに行ったんです。『ドン・キホーテ』全 6 冊、前編 3 冊と後編 3 冊あるんですけど、3 から 6 まで無かったんですよ。そこが空いていたから、誰かが買ったんだと思うんです。一人で「きてるわ～」と思っていました。
A：誰も買わないから入荷されなかったんじゃないですか。
D：確かに。
A：1 巻と 2 巻だけよく売れるっていうか。
B：もうそれは「流行っている」と認定できますね。
C：『ドン・キホーテ』は中世騎士物語をパロディしているんです。中世騎士物語の中でも一番素晴らしいとされている『ティラン・ロ・ブラン』というのがあるんですけど、それは 4 巻本なんですけど、それが平積みされていましたから、やっぱり「きているわ～」と思いました。
A：それはもう流行っていますね。
B：来年「来る」でしょうね。
A：『ガリヴァー旅行記』は読めそうなくらいでしょうか。
C：結構長いけれど、面白いから読めると思います。
A：それを言い出すとなんでも当てはまってしまいますね。
C：まじで。読み終わったら人間が嫌いになっている可能性があります。
D：へ～。
C：いいのかこれで！と思いますね。読めると思います。
A：『ドン・キホーテ』はさすがに長いかなと思うんですが、『ガリヴァー旅行記』なら頑張れるかなと思いました。
C：年末年始に読むのであればいい量だと思います。ただ、先に言っておくと、当時の小説そういうのが多いんだけど、おしっことかいっぱい出てきます。そういう感じです。
A：それは何に警戒して読めばいいんでしょうか。
C：そういうのが出てきても「うわ～」とか言わないでねってことです。そこも含めて、ディケンズとは人間の汚いところの見せ方が全然違うんですよ。いわゆる精神的な汚さみたいのを出すディケンズと、人間ってそういうものだっていうことをとことん書いていくスウィフト。その違いがあるんです。
A：では『ガリヴァー旅行記』にしましょう。
C：やった！通った。珍しく。最近、僕の意見が通らないから。
A：「ちょっと暗いですね」とか言われますからね。
A：いつがいいでしょうか。
C：最初の週。
A：では 4 日の 16 時でお願いします。

C：しつこいですが、すごいですから。岩波がおすすめです。
D：ハードルは上がっています。
C：ガリヴァーは大丈夫です。
A：今回ディケンズを読んでいて、シェイクスピアの『ハムレット』がたとえに使われていました。
C：はいはい。あれはびっくりましたが本当ですか？
A：ん？
C：お父さんがはじめから死んでいるという話。
A：それは死んでいますよね。だから亡霊になって出てくる。
C：そっか。
A：殺されるところからではなくて、殺された後から始まりますよね。『ハムレット』は。
C：そうだったっけ？なんだか、僕らは死んでいないと思っていたけど実は死んでいたのかと思ったんです。例のファイトクラブ現象かと。
A：たとえに使われた「ハムレット」の言葉をみて、「読んだ読んだ」と思えたのが嬉しかったんです。
C：そう思えることがすごいですよね。
D：うんうん。
A：では終わりたいと思います。良いお年を。

※黒板修理中のため、板書はありません。



【日時】
2021年1月4日(月)16:00～17:00

【課題図書】
ジョナサン・スウィフト『ガリヴァー旅行記』

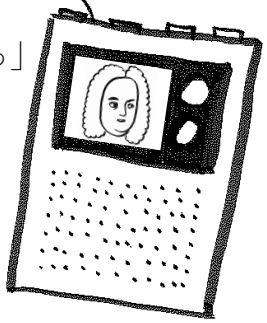
【参加方法】
興味のある方は、以下事務局までご連絡ください。
zoomのアドレスとパスワードを添付して返信いたします。

事務局：みらいつくり研究所　松井
Eメール：matsui-ka@kjnet.onmicrosoft.com

「ラジオ参加」も大歓迎！

「ちょっと議論には加われない」「その時間は作業しているから」
そんなみなさんにおすすめの「ラジオ参加」。
zoomのカメラをオフにして、ラジオみたいに聞き流す。
そんな「学び」があっていい。そんな「参加」があっていい。
興味のある方はぜひ事務局にお問い合わせください。

みらいつくり大学校企画



みらいつくり大学校企画

第 19 回みらいつくり読書会@zoom 記録

第 20 回は、2021/1/18 の 16:00～17:00 に行います。興味のある方は下記事務局までご連絡ください。

事務局 みらいつくり研究所 松井

E メール：matsui-ka@kjnet.onmicrosoft.com

【課題図書】	【実施日時】	【参加者】
スウィフト『ガリヴァー旅行記』	2021/1/4 16:00～17:00	A,B,C,D,E,F,G(＋ラジオ参加 2 名)

内容（※語尾を中心に編集しています）

A：新年明けましておめでとうございます。去年を思い出すと、この読書会でさまざまな本を読んで、みなさんとさまざまな話ができたことが嬉しいなと振り返っていました。新年一回目として 1 月 4 日にやるというのは少し早過ぎたでしょうか。また、1 回目に『ガリヴァー旅行記』を扱うというのが…読書会らしいですね。みなさんと話せるのを楽しみにしていました。今日初めて、B さんと G さんが参加しています。自己紹介をお願いします。

B：B です。よろしくお願いします。

A：私は一応会ったことがあるんですけど、C さんが初めてかと思います。自己紹介をしていただけると知り合えるかと思います。

C：C と言います。今は東京から参加しています。よろしくお願いします。

A：D さんは耳だけでしたか？

D：普通に参加できまーす。

A：それはよかった！

E：画面をオフにとのことでしたね。

A：みなさん今回読めましたか？

E：読めましたか？長かったですよね？

F：長かったー。

E：F さんは何で読んだんですか？

F：これです。

A：初めてみました。

E：どこのやつですか？

F：これは、角川ですね。分厚くて、ここまでしか読めませんでした。

E：さすがの F クオリティ。

F：はっはっは。

E：どこまで読めたんですか？その本は 4 篇まであるやつですよね？

F：全然…。第 1 篇の第 5 章の手前で…。

E：どの辺だろう。

D：まだリリパッド…？

F：そうそう。まだリリパッド。

A：リリパッドどころか…。リリパッドの中でも…。
E：第 5 章…ちょうどあの場面ですね。火を消すところ。
F：まだ火は消していないです。
E：さすがです。了解。
A：私は岩波文庫で読みました。
E：名訳ですよね。平井正穂さん。
A：確かにそうだなと思いました。B さんは読めましたか？
B：これです。
A：どこの出版社ですか？
G：集英社ですね。
E：集英社。それって、小人の国と巨人の国だけの話ですか？
G：そうです。
E：そっか。いわゆる簡易版ですね。
A：私はいわゆる簡易版がどのような終わり方をしているのか気になっていました。後で教えていただきたいです。E さんと C さんは岩波でしたか？
E：僕は同じく岩波です。
C：僕も岩波です。ワイド版岩波文庫っていうやつでした。平井正穂さんなのは同じです。でもでかいっていう。ガリヴァーだけに。
E：これも買いました。これは福音館から出ていて、古典童話シリーズというものです。
G：コーチャンフォーに行ったんですけど、それもありました。
E：そうですか。
G：でも見るからに厚そうなので、やめました。
E：これは第四部まで全部あるんです。そして 3～4 ページに一つずつ絵があるんです。
C：絵がほしいですよね。
E：あとルビもふってあるから、割と読みやすいと思います。あとは注釈本です。
A：もう『ガリヴァー旅行記』を探究していますね。
E：探究しています。
A：図書館に行って調べると、『ガリヴァー旅行記』のめちゃ高い解説本がありました。4 万円くらいしていました。凄まじい本でした。D さんはどうですか？
D：私のやつはオーディオ版で、8 時間ありました。
F：え～。
D：どうやら、講談社のものを朗読したものみたいです。
E：それってどこで見つけたんですか？
D：iTunes で見つけました。1995 年の講談社文芸文庫を朗読したものが元になっているようです。訳者は書いていなかったような。
E：原民樹でしょうか。講談社のは原民樹さんとありますね。
D：もしかして、広島の方でしょうか。あとがきのところに、原爆から 5 年経った話がありました。あとがきに、詩も載っていました。耳で聞くという体験もすごく面白かったです。

A：先月、D さんが何かを目で読むのが大変そうだと言っていたので、その時にオーディオブックを調べたんです。D さんは本読むのが好きだろうし、オーディオブックとか始めているんだろうかなんて考えていたんです。札幌市の図書館ではどうかわかりませんが、公共図書館でオーディオブックの貸出が…なんて記事を見かけたことがありました。
E：そうなんだ。
D：そうですよね。
A：そんなものを D さんにはどうかな、なんて調べていたんです。
D：ありがとうございます。
E：意外と、岩波少年文庫がいなかったですね。
D：おー。
E：F さんはそっちにいくと思いました。
F：私は今外に出られないので、買ってきてもらっています。なので選ぶことができませんでした。
E：なるほど。ご主人に買ってきてもらったんですね。
F：そう、主人に買ってきてもらいました。
E：第一篇の途中だから、何を読んでも一緒ですが。
F：そうそう。全然進んでいない。
A：8 時間かけてオーディオブックというのもすごい話だし。感想から話していきましょう。H さんはラジオ参加でしょうか？
H：ラジオ参加です。でも実は本を買って読むつもりだったんです。でも、F さんより進んでいなくて…3 ページくらいで今日を迎えてしまいました。
F：仲間だね。仲間に入ろう。
E：どれを買ったんですか？
H：岩波文庫を買ったんですけど、札幌駅の紀伊國屋にはもう全然なくて。てっきりみなさんがそこで買ったのかと思っていました。ライバルがたくさんいると思いました。
E：違うと思う…。
A：いわゆる「流行っている」ということですね。『ガリヴァー旅行記』の年になるかもしれません。
D：確かに。そんな時期かも。
A：F さん、読んだところまででいいのでいかがですか？このあと B さん感想を聞きますのでお願いします。
F：異国の名前と異国の文言が脳に入ってきませんでした。私はハリーポッターを読んだ時にも、同じことを思ったのですが、説明を想像できないんです。一体これはなんのことを言っているんだろうと思って挫けるんです。でも 67 ページまでいったので頑張った方かなと思いました。
E：でも、今回はそんなに人の名前は多くないですよね。
F：でもなんか外国の、違う国の発言があったり…。
A：それを言い出したらもう『ガリヴァー旅行記』が成り立たないですよね。書くことがなくなってしまいます。
F：調べたら、映画化されているんですね。小人の国だけ。そっちの方が面白そうだなと思いました。
E：映画って、小人の国だけなんですね。

F：そうみたいです。
E：何回も映画化されているんですよね？
F：そうなんですか。映画は面白そうだなと思いました。
E：でも見ていないんだ。
F：思ったよりも年末年始忙しくて。言い訳ですね。時間があっても興味がないと本を読まないという。みんなの感想を聞いて楽しみにしたいと思います。
E：映画ってジャックブラックのやつですね。2011 年の新しいやつ。
F：『ナイト…』、美術館の映画作った人の。
E：『ナイト・ミュージアム』ですね。
F：あれは面白そう。家族でも見られそうだなと思っています。以上です。
A：B さんどうでしたか？
B：良かったです。
E：読めましたか？
G：小人の国と巨人の国の二つでしたが、最後まで読み聞かせをしました。
E：その二つと言ってもページ数から言うと結構多いですよね。
G：お正月で、特にどこにも出かけてもいなかったので、4 回 5 回くらいに分けて、少しずつ読みました。
E：でも D さんが読んだのは 8 時間だから、4 回に分けても 2 時間ですからね。なるほど。
G：特に読んだ記憶が今までにはなかったんですけど、なんとなく色々なところからこの話は知っていました。詳しくはないんですけど。最後の方に書かれていたのが、「子どものために書かれたのではなくて、大人のために書かれた話」ということでした。それは意外でした。
E：本当ですよね。子ども向けの本だとばかり思っていました。
G：そうですね。ちょっと風刺的なところがあったんですよね。卵をどちらから割るかで戦争をする、といったような部分です。批判的に書いてあるのかなと思っていました。
A：最後はイギリスに戻っておしまい、という感じですか？
G：そうですね。
E：長い方でも、一回一回戻っていますよね。最後は教訓めいた感じで終わるんですか？
G：教訓めいた感じ…は特にないように思います。
E：行って帰ってきた、ということですか。へー。なるほど。
A：巨人の島に行った後の物語を簡単に説明してから進められればと思います。巨人の島に行ったあとも、色々な場所に行くんです。
G：そうなんだ。
A：次に行くのが、ラピュータという島なんです。『天空の城ラピュタ』という映画がありますよね。それの元ネタとなっているのだと思います。空中に浮いた島です。そこに漂着するんです。その後には、天空の島の下にある都市に行ったりとか…。
E：日本にも行っていますよね。第 3 篇だけで 5 つに行っているんですよね。ラピュータ、バルニバービ、グラブダブドリッブ、ラグナグ、日本。
D：日本にも行っていましたね。

E：日本にはちょっとだけだけど。
A：日本はちょっとだけど、その後にまたイギリスに帰ってくる。そこで第３篇が終わりで、最後の第４篇は、フウイヌム国に行きます。そこでは馬が暮らしているんです。
E：その国では、馬がまるで人間のように暮らしていて、人間がヤフーという猿と人間の間のようにして描かれています。そんな話です。
A：最初読んでいて、面白いなと思いながら読んでいました。島を渡っていくのは、以前読書会でも読んだ『星の王子さま』にも似ているなと思ったんです。各星で色々なものが風刺されていきます。批判される。あとは、『ワンピース』という漫画がありますよね。あれも、島を渡っていく途中で巨人族がいたり、天空の島に行ったり、そこの慣れない風習が描かれたりするという意味では似ていると思いました。もちろん戦いがあって、仲間が…というのが『ワンピース』の主題だと思いますので、こういうその土地の風俗を中心に描いているものと主旨は違うように思います。でも描き方は似ているなと思いました。島に行くごとに、私もそこにいたとしたらどうだろうなんて考えていました。「楽しいな」と読んでいたんです。でも途中から怖くなってきました。ずっと、風刺をしているというか、皮肉をずっと言っています。今の世界にも通じるような、政治のこと、軍隊のこと、法律のこと、一つずつ皮肉っていきます。かといって、代案があるわけではなく、ひたすらに皮肉っていく。それが続いていきます。ラピュータくらいまでは「こんな場所に行ってみたいな」と思っていましたが、最後の最後、フウイヌムの国については、読んでいて気持ち悪かったです。私は読書会で読んできたものの中で一番の問題作だと思いました。
E：そうなんだ。
A：問題作というのは、良い意味です。これはすごい本だなと思いました。ヤフーが描かれています。ヤフーは汚いものを好んで、欲望にも汚い。食べ物は好きなだけ汚いものを汚く食べるし、裸になるし。汚く描いてあるヤフー。自分だったら検索エンジンにこの名前はつけません。それに比べて、フウイヌムはいいなと思っていました。でも、途中から、フウイヌムも怖くなってきました。フウイヌムはすごく理性的です。かっちりしている。友愛、博愛を信条としていて理性を超えて何かをすることはない。理性が第一で、死ぬ時にも美しい。徹底的にそうやって書かれています。途中からそちらも怖くなってきました。スウィフトは何を言いたかったんだろうとずっと考えていました。私が思ったのは「この世界に希望なんてない」ということです。そういうことを言いたいのかなと思いました。最初は小人の国に行っていたので、ガリヴァーは「人間山」と呼ばれます。
E：「人間山」ね。
A：あだ名というか。「人間山」と聞くと、私の中ではお相撲さんが出てきちゃいました。それは笑いながら読みました。そんなふうに最初はプププと笑っていましたが、後半怖くて笑えませんでした。
F：「人間山」なんですね。私の持っている本では「巨人山」でした。
E：あー。訳し分けているんですね。D さんのは？
D：「人間山」でした。
G：本によって違うんですね。
E：B さんの本も「人間山」ですか？
B：「人間山」です。
E：やっぱり同じなんですね。

D：私の第一感想は、だんだん怖くなってきたというのがＡさんと同じでした。ジョナサン・スウィフトはアイルランド人です。アイルランド人でイギリスに対する批判を書いているというのは聞いたことがありました。今回、初めてまともに向き合ってみて、どこが風刺になっているのか最初分かりませんでした。リリパッドと巨人国まで読んで、どこをどうやって風刺しているんだろうと分かりませんでした。そこで Wikipedia 程度の解説を読んで「え～深いなぁ」と思いつつ読み進めました。「卵の大きい方と小さい方」という話が、国教・国の宗教を表しているとかいうことも知りました。これは色々な解説があったら面白いだろうなと思っていましたが、分厚い解説書があるんですね。じっくりできる時がきたら読みたいなと思いました。あとは、最後の死なない人間のところがすごく印象に残っています。ある国にそんな人たちが出てきます。稀に、全く死なない人間が生まれてくるんです。その人たちを見て、ガリヴァーは最初にうらやましく思います。でも、実は彼らは疎まれている存在で、本人たちもつらい。
E：死なないけど老いるんですよね。
D：そうそう。老いるし、病いにもなる。
E：死ねないからひたすらに老いていくんです。
F：それはすごくいやです。
D：それこそ、希望のない話なんですよね。その有り様を見てからは、死ねるほうが、定められている方が良いのかな、なんて気分になりました。あとは、ガリヴァーのキャラクターがすごいなと思いました。処世術というか、どこでもやっていけますよね。言葉はスイスイ覚えられるしどこでもうまくやっていけるし、慣れる。最初の方では、家に帰れば妻子と馴染めるし…。すごいなと思っていたんですけど、フウイヌムの国に行って帰ってきた時には、もう馴染めなくなっています。だんだんと帰るたびに、自分の家に対する距離感が変わってくる感じがしました。巨人の国から帰ってきた時には、寄ってくる娘につまみあげます。その時には自分の大きさがわからなくなったんですけど、自分の見方とか故郷とか価値観とかが変わっていきます。そして最後には馴染めなくなってしまった、というのも印象的でした。「ここで終わるんだ」と思いました。そんな感じでした。
A：言語能力がすごいですよね。
D：すごくうらやましい。
A：そしてその場所に慣れていきますよね。まず漂着したら言葉を知ろうとするようになります。
D：うんうん。
A：そうやってしていくのが面白いなと思いました。
C：僕は、急いで読んだんです。2 日間くらいで飛ばしながら…速読に近いような形で読みました。面白かったです。色々な元ネタが出てきました。シェイクスピアの方法とも似ています。フィクションの中で現実を風刺するというような方法です。注釈や訳註を読むと「そういうことなんだ」と思いました。当時のアン女王とか、保育党とか、そういうものに見立てているわけですよね。最後は人類そのものを相対化するというか、そういう感じです。そんな方法論が面白いと思いました。別の文化に行くことで今自分がいる当たり前というものを相対化し、違う角度から論じていくというやり方です。解説も面白くて、このやり方は『ロビンソン・クルーソー』に相当影響を受けているとありました。あとはトマス・モア『ユートピア』ですね。この 2 冊の影響が強いとありました。当時その二つが流行っていたから自分もやろうとなったとありました。あと、スウィフトは自分の誕生日に旧約聖書のヨ

ブ記3章を毎年読むことを習慣にしていたそうです。ヨブ記3章がどういう箇所かというと、「自分が生まれてきた日を呪う」というような箇所なんです。「自分をとりあげた乳母の手は呪われればいいのに。なぜなら自分の人生は苦しみのみなのだから。」、そんな箇所を毎年誕生日に読むという、相当病んだ人だったようです。しかも、この人は聖職者なんですよね。
A：そうそう。
C：イギリスに対して興味があるというか、学んでいるというか。今で言う「本国」というように、当時の感覚でアイルランドとイギリスを同じ国と考えていいのかはわかりませんが、イギリスの政治に物を申したい部分があります。『ガリヴァー旅行記』を書いた後に、論文などで政府への意見書を出すなどしています。そしてスウィフトは最後には精神を病んで死んでしまうんです。
E：スウィフト本人がね。
C：そうです。
F：でも77歳とありましたよね。結構なお年です。
C：そして自分の遺言によって、精神疾患の方のための施設の設立に遺産が用いられたんです。自分が精神を病んで死んだから。なんだかすごい人というか、屈折しているんですよね。生い立ちも。女性に対する異様な憎しみと憧れがあります。生涯に愛人を何人かもつんだけど、ちょっと詳しくは書いていないけれど、DVなのか、異様な女性蔑視のようなものがあります。随所に「女というものは～」と出てきますよね。そういうのも関係しています。解説までを読んで、スウィフトという人間に興味がうつっていきました。童話として抜群に面白いから、世界中の子どもに読まれているということも面白いです。やっていることは高畑勲とかに似ているとも思いました。宮崎駿もそうです。ジブリの。宮崎駿よりも陰険だという意味で、高畑かなと。『平成狸合戦ぽんぽこ』とか『火垂るの墓』とか『かぐや姫』とか、あれは子どもに対して書いているんだけど、あまりにもメッセージが恐ろしすぎます。『火垂るの墓』とかにしても。だから、スウィフトって高畑っぽいなと思いました。とりあえずそんなところです。
E：僕は子ども向けの話としてしか知らなかったんです。世界文学を読むというような放送大学の講座だったんですけど、それで取り上げられていました。なんで『ガリヴァー旅行記』が世界の古典の中に入っているんだ、と思って興味を持ちました。読み始めてから、初めはとっても面白かったです。この人は記者という設定ですよね。新聞記者的な。書き方が読者に宛てた説明文みたいな感じです。そういう感じだから、なんでそんなに細かく書くんだろうと思っていました。そんな表現も面白いなと思いました。僕もみなさんと同じように、リリパッドとかブロブディンナグくらいまでは笑いながら読んでいました。でも…ラピュータに入ってから、ラピュータそのものはよくわからなかったんだけど、その後に研究所が出てきますよね。ラガードの研究所です。バルニバーニという島の中に、ラガードという大研究所があるんです。そこで、みんなは色々な研究をしています。どの研究も僕らの感覚で言うと「なんで」と思います。例えば、お腹の中に入った有害なものを取り出すために、ポンプでとことん空気を入れる、そして身体中の空気を外に出したらよくなる、と言うんです。でも空気が入りすぎて破裂して死んじゃったりするんです。
F：えー。
E：そんなことをめちゃ真面目にやっているわけです。とことんまでありとあらゆる科学を批判していくというか、そんな感じのところがあります。その辺りから「これはただものじゃないぞ」という感じ

が漂ってきました。最後にフウイヌムの国に行ったあとは「これはすごい小説だな」と思いながら読みました。一番印象に残ったのは、フウイヌムの馬の主人が出てくるところです。馬の主人に、ガリヴァーが自分の国の政治制度について説明をするシーンがあります。ガリヴァーはとことん理詰めで説明しているつもりなんだけれど、フウイヌムの馬の主人に、言い返されるわけじゃなくただ質問されるんです。「なんでそれは必要なんだ」と。それに対してガリヴァーは「こうで、こうで」というように説明します。馬の主人は「そんなものはいらないでしょう」というように言います。それを読みながら考えると、A くんが言っていたように、私たちの身の回りには、人間というものが理性だけで合理的に理屈だけで理解して行動しているだけなら必要のないものがたくさんあるんですよね。フウイヌムの国の馬たちは理性しかないんです。感情もないんですよね。愛情もないんですよね。夫婦間で結婚しているのも、子孫を残すということだけで、恋愛感情とかはないんじゃなかったんでしたっけ。とにかく、感情というものを抜いた存在がフウイヌムという馬なんです。確かに、人間が歴史や制度をつくってきたけれど、それって人間が理性的であるという前提で考えている風ですけど、実はそうじゃないなと思いました。面白かったのは、ガリヴァーはヤフーという野蛮な生き物と同じように扱われるわけです。ガリヴァー自身は「あいつらとは違う」と言うんだけど、周りからは同じだと思われています。最後の最後に、馬の主人から「自分の国に帰れ」と言われます。それは、フウイヌムの国で、他の馬たちから「あいつはあんなヤフーを飼っている」と言われる、「あんな野蛮なやつを飼っているのはおかしい」と言われて、置いておくわけにはいかないとなります。最後には泣きながら島から出てきます。泣きながら船に乗っているガリヴァーに対して、すごく仲良くなった馬が声をかけます。その時に。「なんとかのヤフーくん」と呼びかけるんです。とっても仲が良かった人も、ヤフーとしてしか見ていなかったんです。そして自分の国に帰るんだけど、ガリヴァーは奥さんや子どもの匂いが嫌になって近づけなくなるんです。最初は馬の国に行った時には「馬の匂いがだめだ」と言っていたんですよ。でも、いつしか、馬の匂いを好きになっていて、逆に人間の匂いがダメになっている。一緒にご飯も食べられなくなっている。別な部屋で過ごすようになり、唯一の慰めがイギリスにある馬の厩舎に馬の匂いを嗅ぎに行くことになるんです。なんだかそれが…怖いとは思わなかったんだけど…人間が理性的であると思っていることへの自己批判というかそんなことを感じながら読みました。あとはガリヴァーのキャラクターです。なんでそんなすぐに出て行っちゃうんだろうというか、冒険が好き過ぎるというか。とにかく毎回死にそうな思いをするのに、また出かけてしまう。

D：懲りないですよね。

E：そんなことを繰り返すんだけど、最後は出かけないんですよね。最後旅に出たいとはありません。その辺りのガリヴァーの変化も面白いと思いました。岩波少年文庫を読んだ人がいるかなと思ったのですが、いなかったので比較はできませんでしたね。

A：私は改めて考えても怖いですね。C さんが言っていたように、解説も面白かったです。私は岩波の解説を読みましたが。スウィフトは最後に狂人となったと書いてありました。それは『ガリヴァー旅行記』を読んでいても、この本を書く人は狂っていきそうだと思いました。女性に対する屈折した感じ、家族に対してというのかもしれませんがそこも作品を読んでいる時にも強く感じました。あとは『ロビンソン・クルーソー』『ユートピア』を読んでみたいと思いました。

E：『ロビンソン・クルーソー』はほぼ同時代ですよね。これのちょっと前ですよね。

A：読まなきゃなぁと思いました。カレル・チャペックの『ロボット』を読んでいた時にも『ユートピ

ア』が出てきました。やはり『ユートピア』は読んでおいた方がいいんだなと思いました。
E：『ユートピア』は薄いですよね。
A：そんなに厚くなかったように思います。
E：あれは安楽死が認められている国の話なんですよね。
A：へ〜。
F：へ〜。
D：へ〜。
A：お互いの感想を聞いてどうですか？スウィフトがどんなことを言いたかったのかについてでもいいですし。
G：私たちが読んだのは一部と二部なので、三部四部は全然違うんだなと思いました。一部二部だけだと、なんだか明るくて楽しい感じがしたんですけど。三部四部は違うんだなと思います。
E：誰がそうしたんでしょうね。子ども向けにつくった人はすごいなと思うんですけど。
A：良かったか悪かったかでいうと、私は子ども向けにして良かったんだろうかと思います。
E：でも確かに、前半の一部二部と後半の三部四部が違い過ぎるから。前半の一部二部だけ表現を変えれば子ども向けになるな、と思いますよね。
D：短いバージョンでは、一部の最後にガリヴァーは処刑されそうになっているんですか？私の読んだものでは、餓死するのと目を潰すのをどちらにしようということになります。それも短いバージョンにもあるんですか？
G：目を潰すということは…なかったように思います。
E：小人の国で、お妃さまの家が火事になって、それをおしっこをかけて消すというのはありますか？
D：ふふふ。
G：そういうのも出てこないですね。
E：やっぱりそうなんだ。巨人のガリヴァーがおしっこをかけて、それで処刑されるに至るんですよね？
D：そうですそうです。
A：それも理由の一つなんですよね。
E：そういうのもないんですね。
A：王様のところでおしっこをしちゃいけない、という法律があるんですよね。
E：王様は「火事を消してくれたから…」と言うんだけど、お妃さまが「こんなの考えられない」と言うんだよね。
D：そして、暗殺を目論む海軍の人かな、がいるんですよね。
E：その前あたりにある、大きい方をしたくなっちゃってどうしよう、といったくだりもあります。そこも子ども向けにはカットされていそうですね。どうやってしたかも詳細に書かれていますもんね。
C：結構、糞尿関係というかすごい多いよね。それも解説にありました。
E：『ガルガンチュアとパンタグリュエル』というフランシス・ラブレーが書いた有名な小説があります。その人が糞尿もので全編通して書いているんですよね。昔の小説って、それらが「汚い」「なんで」というふうにではなく、「それが文学だ」と思われていたんでしょうね。だから『ガリヴァー旅行記』もそうなのかなと思いました。
A：解説に書いてありましたよね。その辺りについて。

C：書いていました。匂いとか、糞尿とか、そういうのをやたらと書きたがるというのも、彼のエキセントリックな部分が表れていると平井正穂さんは書いていました。
A：「人間が腐敗して汚れきっていることを徹底して風刺したい」ということみたいです。
F：私の解説にも書いてあります。「この作家は元々醜悪なものへの興味が強いらしく…タブーをおかすことにもあえて喜びを見いだすタイプだった」とあります。
C：はい。「こんな表現をすることを読者にゆるして欲しい」と書きながら、めちゃ嬉しそうに書いていますよね。「本当は書きたくないのだが…」と書きながら、喜んでいます。そういう感じなんですよ。
A：1 篇 2 篇だけを子ども版にするのが果たしていいことなのか、と私が思う理由は、1 篇 2 篇にも同じように作者のメッセージは込められているわけです。隠されているかもしれないけれど。芥川龍之介ならそういうことをしそうだけど、悪気なく短くしてしまったのだとしたら…ちょっと嫌だなと思います。
E：もうこんな時間ですね。
A：そろそろ次のことを考えないといけないですね。
E：次のを探すのに時間がかかるから。
A：次をどうしようか、ですね。『ガリヴァー旅行記』については、話したいことがたくさんありすぎて…。
C：ジブリの宮崎駿も高畑も、もちろんこれを読んでいますよね。ラピュタが出てくるわけだから。なんだか『天空の城 ラピュタ』のセリフの中に出てくるらしいんですよね。「ガリヴァーはこう言ったけど…」というようなセリフです。
F：へー。
C：僕はそんなことは知らなかったんだけど、Amazon レビューに書いてありました。『天空の城 ラピュタ』の一節に『ガリヴァー旅行記』が引用されているらしいです。
E：ラピュタを自分のものにしようとした男の人いますよね、あの眼鏡の。あの人が最後にいうはずですね。
C：そうなんだ。ジブリってスウィフトから学んでいるんだなと思いました。ファンタジーの中で現実を批評するっていうことです。『風の谷のナウシカ』もファンタジーで環境問題を扱うわけです。『平成狸合戦ぽんぽこ』も環境問題についてです。環境問題が多いですね。いずれにしても社会を風刺しています。『崖の上のポニョ』は少子高齢化とか言いますよね。『ガリヴァー旅行記』はそういう手法の原点の一つなんだろうなと思いました。
A：次はどうしましょうか。もし G さん読みたい本があればいかがですか？海外の古典、日本のものでも構いませんが。古典で読んでみたいものがあったら。
G：古典ですか…。古典といえば『源氏物語』はちょっと長いでしょうか。
E：『源氏物語』ね。長いんだよね。
A：読んでみたいですね。
E：長いんですよね？
A：確かすごく長いはずです。
E：でも、世界文学に関わる本を読んでいると、海外の人たちの書いたものでも『源氏物語』は載っているんです。世界から見ても、1200 年代にあの物語を書けていることは珍しいらしいです。

D：へ～。
E：どこかで読みたいですね。
D：「青空朗読」という青空文庫を朗読版にしたものを調べているんですけど、『源氏物語』はタイトルごとに分かれてありますね。与謝野晶子さんが訳したものみたいです。
E：池澤夏樹さんの訳で、9巻セットですね。
F：漫画は読んだことある。
E：海外の古典でありますか？
G：海外ですか…。うーん。シェイクスピアとか？
E：シェイクスピアはこないだ読んだんですよね。三つだっけ？
F：二つじゃなかったでしたっけ？
A：そう。二つ。
E：『マクベス』と…。
A：『お気に召すまま』ですね。
E：悲劇と喜劇をひとつずつ読んだんですよね。
G：なんでしょう。
A：『ガリヴァー旅行記』の続きでいうと、『ユートピア』を読みたいですね。
E：トマス・モアですね。
F：あ～。
C：読んでみたいけれど、長さはどうでしょうかね。
E：めちゃ短いはずですよ。
A：初心に返って『やし酒飲み』も。
E：これね。
A：手元に置いているじゃないですか。
E：希望のない話でよければ、年末に読んでびっくりした『フランケンシュタイン』がおすすめです。
C：あれはいいですよね。僕も読みました。
E：『メアリーの総て』という映画があります。メアリーは『フランケンシュタイン』を書いた人なんですけど。『ガリヴァー旅行記』と同じく、『フランケンシュタイン』も僕たちが思っているものと全然違うんです。
A：へ～。
E：とことんまでに悲しい話なんです。
C：そうだね、切ないです。
A：どの訳を読めばいいんだろうと思っていたことがありました。
E：一番新しい光文社古典新訳文庫を読みました。あれを当時の18歳の女性が書いているというのが衝撃的です。映画とともにみたからよかったのかもしれないけど。映画も良かったですよ。エル・ファニングがメアリー・シェリーを演じているんです。
F：かわいい人だ。
E：面白かったです。映画は感動作です。『フランケンシュタイン』はものすごく悲しい話です。
A：Dさんは読みたい本はありますか？

D：今は思いつかないです。色々あった気がするんですけど…。考えておきます。
E：あとは、年末には『失われた時をもとめて』を少し読みました。全 13 冊ですが。あと、二十世紀の大ベストセラーと言われているのが『ユリシーズ』ですよね。
D：ジェイムズ・ジョイスですね。
E：読みましたか？
D：読みました。けどだいぶ昔の話なので忘れています。
E：あれはひどいでしょう。
D：あれはひどいですが、ケルティックですね。
E：なんであれが代表的な世界の古典になったのか…。
D：あれは、ケルトの文様とリンクしているんですよね。終わりも始まりも。
E：書き方が尋常じゃないですよね。
D：訳もすごいですよね。
E：半分くらい註なんですよ。このくらい。
C：なんじゃそら。
E：註を読まないと何を言っているのか全然わからない。
F：へー。
E：なおかつ『オデュッセイア』という古代の作品をとことんまでに分解している。各章のタイトルが『オデュッセイア』のタイトルなんですよね。でも、『オデュッセイア』を読んだけれど『ユリシーズ』は全くわからない。
A：『ユリシーズ』にするには長すぎるかなと思うんですけど。
F：長い長い。
E：取り上げない方がいいと思います。
D：これはきついと思います。
F：私なんて「0 歳児でもわかる相対性理論」という本を読んだんですよ。
D：すごい。
E：そういえば、F さんが勧めていた本、買ってきましたよ。C さんも勧めていたやつ。
C：『フェルマーの最終定理』ですね。サイモン・シン。あれは面白いですね。
E：でも小説ではないからなぁ。『ユートピア』いいけどね。
A：今のところ『ユートピア』でしょうか。
C：次回じゃなくてもいいけど、ジョージ・オーウェルやったらいいかなと思うんです。
E：『1984 年』？
C：『動物農場』か『1984 年』かどちらか。どっちでもいいと思うんだけど。
E：『1984 年』は長いんじゃなかったっけ？
C：長くないような気がします。僕は『1984 年』は英語で読んでいるんです。数少ない英語で読んだ本なんです。
E：『動物農場』は短いですよね。
C：同じくらいだったような…。
E：『1984 年』はすごく長かったような気がします。

A：私も、一度読み始めて、途中で図書館に返した気がします。
D：382 ページとありますね。
C：そっか、結構ありますね。じゃあ『ユートピア』とかの方がいいのかな。
E：『動物農場』は…。
A：ジョージ・オーウェル、読みたいですねぇ。
C：『1984 年』がより現代的であるかなとは思いますけどね。歴史を修正していく部署が「真理省」と呼ばれていたり、戦争を遂行するところが「平和省」と呼ばれていたり。本当に今の政治と同じなんですよね。そんなのが好きで、やはり古典だなと思うんです。
E：『動物農場』だと、254 ページとありますね。
A：そちらの方が短いですね。
C：『動物農場』は、独裁の話なんです。豚が権力をもっていくという、おそらくナチスのことなんですよね。
E：では、馬から豚に行くことになりますね。『動物農場』はどうですか？
A：『動物農場』にしましょうか。
C：面白いですよ。両方とも名作です。ちなみにイギリス人です。
F：まだヨーロッパに留まっていられる。
E：漫画版があるんですね。石ノ森章太郎、ちくま文庫から出ています。じゃあ『動物農場』にしましょう。いつにしますか？
…
A：1 月 18 日(月)16:00～17:00 でお願いします。

※黒板修理中のため、板書はありません。

みらいつくり

第20回 読書会 @Zoom

【日時】
2021年1月18日(月)16:00～17:00

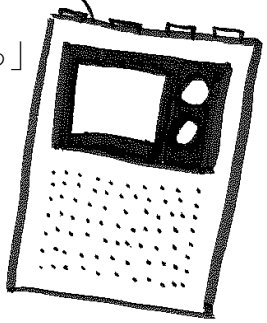
【課題図書】
ジョージ・オーウェル『動物農場』

【参加方法】
興味のある方は、以下事務局までご連絡ください。
zoomのアドレスとパスワードを添付して返信いたします。

事務局：みらいつくり研究所　松井
Eメール：matsui-ka@kjnet.onmicrosoft.com

「ラジオ参加」も大歓迎！

「ちょっと議論には加われない」「その時間は作業しているから」
そんなみなさんにおすすめの「ラジオ参加」。
zoomのカメラをオフにして、ラジオみたいに聞き流す。
そんな「学び」があっていい。そんな「参加」があっていい。
興味のある方はぜひ事務局にお問い合わせください。



みらいつくり大学校企画

みらいつくり大学校企画

第 20 回みらいつくり読書会@zoom 記録

第 21 回は、2021/2/1 の 16:00～17:00 に行います。興味のある方は下記事務局までご連絡ください。

事務局 みらいつくり研究所 松井

E メール：matsui-ka@kjnet.onmicrosoft.com

【課題図書】	【実施日時】	【参加者】
ジョージ・オーウェル『動物農場』	2021/1/18 16:00～17:00	A,B,C,D,E(＋ラジオ参加 1 名)

内容（※語尾を中心に編集しています）
A：今日はジョージ・オーウェル、読むことができましたか？ B：あれ？C さん読めたの？ C：読めましたよー。だって漫画があったんだもん。 D：あー漫画。 C：石ノ森章太郎さんの漫画。 B：はいはい。 C：漫画アプリで買いましたよ。 E：へ～。 B：僕も今日のお昼に漫画版を Kindle で読みましたが、割とそのままですね。 A：僕も漫画版を買いました。そのままだなと思いました。他は誰の訳で読みましたか？ B：僕はこれです。 A：岩波ですね。 B：これが一番新しいんだよね？ A：私はハヤカワ epi 文庫が一番新しいと思ってこれにしたんですが…。 D：僕もそれです。 B：それは何年に出版ですか？ A：いつだろう…。2016 年とあります。 B：そちらの方が新しいですね。こちらは 2009 年です。 A：E さんは、オーディオですか？ E：そうです。オーディオで見つけられたのが、2012 年の IBC パブリッシングのラダーシリーズという、ちょっと簡単な英語に書き換えたものだと思います。オーディオ英語版で聴けました。 B：オーディオって、雰囲気出す感じなんですか？それとも淡々と朗読する感じ？ E：結構淡々と朗読をしていて聞きやすいです。効果音とかもないですし。 B：Kindle の機能で、英語版だと自動読み上げがありますよね。結構前からあるような気がしますが、日本語はまだないんでしょうか。 D：あるのかな、どうだろう。 E：私はタブレットの読み上げ機能を使ったことがあります。それだと日本語でも英語でも棒読みで聴けたもんじゃなかったんです。

B：でも日本語も読んでくれるんだ。
E：一応日本語も読んではくれましたが、それは視覚障害の方のための機能でもあるので、途中で「モドル」「ススム」「１ページモドル」という機能的なボタンも読み上げちゃんですよね。だからあまり現実的ではなくて使えませんでした。
A：早速ですが、今日はみんな読めたということなので、物語の内容を確認することはせずに感想に行けたらと思います。C さんいかがですか？
C：いつも私からなんですけど！全然いいんですが。私は石ノ森章太郎さんの漫画が読みやすくてスラスラはいってきました。漫画の方で、最後に豚が人間っぽく描かれていて、なんでだろうと思いました。調べてみると、「最後は人間と変わらなかった」とあったのでなるほどと思いました。この本は結構昔に書かれた本ですよね。今私は NHK『100 分 de 名著』でマルクス『資本論』をみています。資本主義の台頭によって人間の生活がどうなるのかを危惧していているという内容です。この本も最初はみんなで頑張ろうと言っていたのに、どんどんリーダーが出てきて、その人たちだけが裕福になっていく。信じて頑張っている人もいれば、自分の置かれている状況がわからずに頑張っている人もいます。騙されているわけではないけれど、丸め込まれている人もいる。これって変わらない世の中なんだなと思いました。この本を読みながら考えていたんですけど、私たちは生活の質を上げるために色々とがんばりますよね、生活の質が整ったときに自分の中で余裕ができて、心が豊かになる。そのときに周りの人に優しくなれる、寛容になれる。私はそんなことを考えています。そうなると、今色々と問題なっている障害者のこと、LGBT のこと、色々な人たちを受け入れることができるんじゃないかなと思います。確かに、マルクスの『資本論』や、オーウェルの『動物農場』とかが、「こうなったら危ないよ」と言っているけれど、今の世の中は確実に良くなっているんじゃないかなと思いました。私はそう思いました。こういう本が出ていて、本を読まない私でも、もうちょっとこうした方がいいんじゃないかなんて考えます。そんなふうに、なんとなくでも気がつく人が増えて、社会が少しずつよくなっているんじゃないかと思いました。「今の世の中は寛容じゃない」という人がいます。でも、先日別なところで出てきたアリストテレスの時代なんかと比べて、女性や奴隷のことを考えると、今の時代はより多くの人たちを受け入れられているんじゃないかなと思います。もっとこれからいい世の中になるのかな、なんて明るい未来を想像しました。こういう教科書的な本をみんなが読めたらいいのになと思いました。以上です。
B：相変わらずラディカルな読みですね。
C：なんでですかー。
A：ラディカルな読みに定評がありますよね。
B：ちなみに、『動物農場』は社会主義とか共産主義の世界の話だから、マルクスが批判した資本主義の話とは全く別です。マルクスは資本主義を批判してそれを壊すためには共産主義社会をつくるしかない、そのためには革命を起こすしかないと言いました。その革命を起こした後にどうなっていくのか、というのが『動物農場』で描かれています。もともとソヴィエトの話ですけれど。だから混同しない方がいいかなとは思います。でも『100 分 de 名著』をみているんですね。テレビで。
C：そうなんです！でも 1 回目は寝ちゃうんです。難しすぎて。「寝ちゃった！」ってなる。だから 2 回みてます。
A：100 分じゃないってことですね。

C：そう。
B：確かに。
A：あとがきにもあった内容が心に残っています。共産主義を批判しているというよりは、ソ連のスターリニズム批判だと書いてありました。共産主義＝スターリニズムではないんだなと勉強になりました。そして、マルクスが言っていたことが必ずしもスターリニズムではないということです。それは押さえておかなきゃいけないと思います。テーマに、労働や生活といったものがありますが、加えて「報道」が含まれていると思います。報道の自由、報道のあり方の問題が含まれています。全編を通じて、労働における幸せは描かれていたところが気になりました。労働するときにある何かを生みだす楽しさ。体制が変化しても、いかに劣悪な環境でも、「労働する幸せ」が所々に描かれていたように思いました。それは良い意味では全然なくて、「労働が楽しい」「嬉しい」とかいうことは、盲目的につくられうるということです。背後にある思想やプロパカンダに強い影響を受けて、「労働の幸せ」が意図的につくられてしまうということを考えました。それって実は…私は「働くことって楽しい」とか「今ある生活の楽しさに目を向けていこう」と考えることが多いんです。そう思っていたとしても、盲目的に体制の変化や抑圧状況の再生産という歴史に加わりうる、なり得るんだということです。だから「いかに生活の喜びを見出していくのか」というだけではだめなんだなと思いました。体制がどうなっているのか、政治がどうなっているのか、報道がどうあるのか、そういった自分の生活よりも大きな目線で見ていく必要があるんだと思いました。かといって生活の中に喜びを見いだす必要がないということではありませんが。読み終わった後にも、思い出してそんなことを考えていました。C さんが言っていた、豚が人のようになってしまうというところがあります。小説で言うと第 10 章に当たるのですが、漫画版だと 4 ページだけなんです。でも、その 4 ページで見事に表していると思うんです。
E：えー。見せて。
A：見にくいかもしれないけれど…。（画面に漫画をうつす。）馬が家の中をのぞいています。中では、豚と人間がビールを飲んでいる。最後のページが、ドン！と人間のようになった豚のアップで終わりです。
B：その前に、豚と人間が混ざったようなコマがありますよね？
A：そうです。下のところに。それがあって、豚人間のカットですね。
E：なるほど。
A：これをみて、石ノ森章太郎さんはすごいなと思いました。そんな感想でした。
B：うんうん。
E：へ〜。
E：C さん A さんの感想を聞いていて、お二人とも自分自身の状況や今の社会に引きつけて読んでいて、それがすごいなと思いました。私は書かれた舞台について考えながら読みました。ソ連やスターリン主義についての批判です。モデルと登場人物が一対一であるような、直接的な風刺になっているなと思いました。本筋とはずれますが、寓話としても細かいところにこだわっていて面白かったです。羊たちが 15 分間に渡って同じ言葉を繰り返すところとか、ナポレオンがビールを飲むときには 1 ガロンでしたっけ？3.7 リットルくらいまでなんですよね。それをファームハウスクラウン…という陶器の会社のスープボウルで飲むんです。それはイギリスの会社なんです。ロイヤルチャイナの会社です。大きな豚が、その陶器で飲んでいるという様子が描写されていて、寓話的なおかしみもありました。

細かいところまで効かせるようになっているなと思いました。最後の、豚と人間の見分けがつかなくなってしまう場面について考えていたんですけど、これはソ連やスターリニズム、全体主義に対する批判だけではないように思います。見分けがつかなくなる、豚がもっていて他の動物がもっていなかったもの。簡単な言葉で言うと「欲」かなと思います。人間性、欲望、そういうものに対する「批判」ではなくても「指摘」にはなっているなと思いました。その時代には関わらず、そういうことを伝えるラストなのかなと思いました。今のところそんな感じです。
B：英語だと、「よつあしいい、ふたつあしだめ」ってどうありますか？
E：「Four legs good, two legs bad.」ですね。
B：へ～。
C：そのままですね。
E：最後は、「Four legs good, two legs better.」だったと思います。
B：他の日本語訳はどうですか？「よつあしいい、ふたつあしだめ」ですか？
D：最後の方ですよね？
B：最後の方、こちらでは「めっぽういい」になっています。
A：何章ですか？
B：10 章です。
A：D さんと同じだと思いますが…。
E：オーディオブックは読み返しがしにくいことに気がつきました。本だったらすぐたどれるのに…。
B：Kindle も同じですよね。
A：「四本足はよい、二本足はもっとよい！」ですね。
B：その前はなんだったんでしょう。これ（岩波文庫）は、ひらがなになっているので、このセリフを言っている羊たちの可愛さったらないんですよ。
C：ふふふ。
A：ひらがななんだー。
B：まるで小さい赤ちゃんが言っているような感じになっているんです。
A：羊ってそういうような感じに描かれていますよね。ひらがなにするのはすごく良い訳な気がします。
B：岩波は訳がすごく良かった気がします。
B：僕は、マルクスとかを結構学んでいました。でも、マルクス理論はやったけれど、その後のマルクス主義、その後の共産主義とかはあまり読んでいません。スターリンやトロツキーの話をなんとなくは知っていますが、こういうことなんだと思いました。そんなことを、1945 年に書いているというのは…。公式にソヴィエトの中でスターリン批判がなされたのは 1960 年代だったと思います。その 20 年前に、これらの情報をどこかから得られていたということですよね。オーウェルは、スペイン内戦でトロツキー派の中に入って戦っているんですよね。多分、その辺りから内部の情報が入ってきていたのかなと思っていました。この人は新聞とかのメディアで仕入れた情報だけを用いているとあとがきにありました。どちらにしても、当時のわかっている人たちはこれだけわかっていたということです。逆にいうと、最後に「ウクライナ語版への序文」があるんですが、情報が入ってこなかったのではなく、イギリスのメディアが情報を出さなかったということなんですよね？
D：そうそう。それで出版が一年遅れたと書いてありました。

B：ソヴィエトのことも、ソヴィエトから情報が入ってこないわけではなく、入ってくるんだけど出さなかった。
D：本来出すはずだった序文は、ずっと出ていなかった。ここにある「序文（案)」ですよね。これはお蔵になったんです。それは、スターリンの話だっていうのを序文で言っているからです。それはイギリスでもアメリカでもタブーだった。それは日独伊に勝てたのはソ連が参戦したからだという連合国側の建前があったようです。ソ連を批判するというのはできなかった。「連合国の団結があったおかげで日独伊に勝てた！」というほやほやのころだから。ソ連批判、中国批判はタブーで、そういうことをする人は、マスコミから消されていった。それをあえて寓話という形で行ったのが、オーウェルです。それは皮肉なことです。なぜならオーウェルは社会主義者だからです。『1984 年』って、マスコミが言論弾圧をするということにフォーカスが当たっているのですが、こういう経験のことを言っているんだと思います。「イギリス政府も言論を封じるよね」ってことです。
B：いわゆる支配層、中央委員会的なものってあるじゃないですか。それのやり方のすごさ、うまさ、ってありますね。情報を与えないっていうのもそうなんですけど、議事録を残さないですよね。だから一切検証のしようがない。安倍首相がやっていたことと似ていますが、全く辿れない。
D：まるで、この数年の日本の政治を見ているようだと思いました。
B：その文言の差し替え方。十戒ならぬ七戒への差し込み方。その素晴らしさ。
D：すごいよね。
B：「～だめ」と言いながら、「～は除く」と加えたり。
D：「シーツの敷かれたベッドでは…」とかね。まさに自民党の常套手段です。
B：漫画だと、七戒の改変されていく過程があまり描かれていないんです。
C：そうそう。
B：ちょこっと壁にバーンと貼られていて、それが途中で全部変わっている。原作は、一個ずつ変わっていくんですよね。
D：スライドしていくんですよね。地滑り的に。
B：最後は、「平等である。しかしある動物はほかの動物よりももっと平等である。」となる。そもそも「平等」の概念が根底から覆されている。
D：言語を破壊していく感じが、まさに安倍政権そっくりですよね。
B：それがとっても面白かったです。漫画版を見て思ったんですが、原作だとナポレオンとスノーボールがどんな見た目かは触れられていません。
E：ちょっとありましたよね。
B：あったっけ？
E：太っていく時に。
B：漫画版は、とても戯画化しているというか…ナポレオンは真っ黒です。トロツキーの本が光文社古典新訳文庫から出ているんですが、最後スターリンについて書いています。「スターリンは浅黒くて、ボソボソしゃべり、何を言っているかはっきりわからないような…噂話みたいなことを言う。そしてそれにトロツキーが何も反応しなかったら、急に距離を置く。」…そんなことを書いているんです。そんなことも、漫画の方がよくわかるように書いてありました。石ノ森章太郎はすごいなと思いました。
A：そうそう。この黒い方がナポレオンで、少し色が薄いのがスノーボールなんです。ナポレオンは、

明らかに悪いやつとして描かれています。
B：でも、最初はスノーボールが、アジテーションの演説をしています。一回目の戦いの時、牛小屋の戦いの時にも、スノーボールが最前線に立っています。ナポレオンは出てこないです。その辺りも面白かったです。本当にトロツキーとスターリンの関係をそのまま書いたんだろうなと思いました。
A：今の話もあったように、単にファシズムとかスターリニズムを批判している、ということではなくて、それらを無意識的に受け入れてしまっているイギリスなどにいる知識人たちを批判しているんだよなと思いました。面白かったです。
D：僕は、これは Kindle で昔読んでいました。『1984 年』を英語で読んだ気がしていましたが、英語で読んでいたのはこちらでした。Kindle を使って英語で読んだのは唯一これくらいなんです。Kindle は辞書が使えるじゃないですか。それが最初楽しくて読んだんです。それ以降一回もやっていないけど。「『動物農場』は、アメリカの中学校の教科書に載っているんだよ」、と妻が言っていました。だったら自分でも読めるかもしれないと思って、読みました。その時の記憶だと、日本語で読むよりも不思議と早く読めたんです。ほとんどの本って、英語の方が 5 倍以上時間がかかります。多分、この本の構造上、平たい英語を使っているんですね。そして日本語にしたほうが角張っている。文字が多くなる。その時も、すごい本だと思ったし、『1984 年』とあわせて、このディストピア小説には現代的な意味があるなと思ったんです。それが 2015 年とかだったはずです。最近はより重要な作品だと思うようになりました。2016 年にブレグジッドとトランプの当選があった時に、『1984 年』がすごく売れたらしいんです。それは、政府が事実を改変していくことが、トレンドだからなんですね。自民党政権を含めて。僕はやはり…先ほども出た「動物七戒」というのがありますが、革命の祖メイジャーはマルクスともレーニンとも取れますよね。理論を構成した人です。スノーボールがトロツキーで、ナポレオンがスターリン。スクイラーというのが、ナチスのゲッペルスを意識しているんじゃないかと解説にありました。ナチスの広報を担当した官僚です。ゲッペルスの名言があります。「大きな嘘を堂々とつき続けると、それは真実になる」というものです。それを地でいったわけです。動物七戒を少しずつ書き換えていって、「動物はベッドで寝てはいけない」を「動物はシーツのあるベッドで寝てはいけない」にする。「全ての動物は動物を殺してはいけない」を「理由なしに殺してはいけない」にする。「酒を飲んではいけない」を「過剰に」とする。これって、何かを付け加えることで縮小解釈するわけです。僕は自民党の憲法改正草案を、自民党のホームページからダウンロードして印刷し、時々読んでいるんです。これ平成 24 年のものです。一番新しいものです。これってすごくて、基本的人権のところは、現憲法では「基本的人権は尊重される」というところを、草案では「公共の福祉に反しない限り」が付け加えられています。報道の自由のところも信教の自由も、「公共の福祉に反しない限り」と変えているんです。これって彼らのやり口と同じで、本当に今こそ、ディストピアに近づいているんだなと思いました。そんな感じです。
A：色々な話が出ましたがどうでしょうか。
B：歌がね。共産主義の世界的な集まりで作った「インターナショナル」という歌があります。世界中の共産主義者たちによって歌われて、日本語にも訳されています。それが、『動物農場』の中では内容が途中で変えられてしまいます。それも、面白いなと思いました。
A：私は『被抑圧者の教育学』も思い出しました。
B：フレイレ。

A：はい。抑圧構造が再生産されているということです。力関係も、最初は人間と動物が対比されていますが、後半は動物の中でも豚と羊などが対比されていきます。D さんが言っていたように『動物農場』はディストピア小説としてバッドエンドに描かれていますが、この抑圧構造を乗り越えていくような物語があるとしたらどんなものかなと想像しました。その方法を私はまだ知らないなと思いました。これはバッドエンドですよね。
B：フレイレはマルクス主義者ですからね。
D：オーウェルの書いた『1984 年』もバッドエンドなんです。ただ、バッドエンドの SF、物語の意義というのは、高まっていると思っています。一度書かれたことって現実に影響を与えてしまいます。今『三体』という中国の SF 小説があります。僕も Kindle で買ったんですけど、まだ読んでいません。2019 年かな、全世界でめちゃくちゃ売れたんですよね。あれは面白いらしいんです。池上彰も年間のベストテンに入れていました。内容までは詳しく知りませんが、Netflix が版権を買ったらしいんです。今ドラマ化をしているんですって。ただ、その脚本家が死んだんです。毒殺されたんです。不審死をしていて。多分、共産党批判をしている本ではないんですよ。そうだったらそもそも世には出せないから。でも SF の力ってそういうところにあって、現実を相対化してしまう訳です。一旦、相対化されてしまうと、もうその手は使えなくなってしまう。そういう力が多分あって。中国共産党はそういうのをすごく嫌がっているだろうと思います。独裁政治とかに対して、もちろん新聞記者が真実を暴くという方法もいいんだけど、今言ったように、フィクションの力は、それはそれであるのだと思います。大事ですよね。最近、『危険人物をリーダーに選ばないためにできること』という本を読みました。そこで語られていたことですが、危険なポピュリストが使う常套手段があります。それは「架空の危機の三段論法」というらしいです。「我々は危機にある」と彼らは言うらしいです。そして「その危機は誰か外敵によって（もしくは内部の裏切り者によって)、起こされている」と言います。これが二番目です。最後が「このピンチを乗り切るには私しかいない」と言うらしいです。この論法は、まさにトランプがそうですよね。「今はアメリカの危機だ」「それは中国・メキシコからの不法移民による」「壁を作れる私にしか解決できない」と言いました。まさにそうです。安倍さん的なもの、「日本を、取り戻す。」なんて言うのは、トランプほど露骨ではないけれど、共通点があります。今、世界で危険人物が選ばれる流れがありますから、こういうフィクションを読み返す意味も大いにあると思います。
A：半年くらい前に「世界 SF 作家会議」といって、「今こそ SF を読まないと」という動画が公開されていました。SF 作家が集まって議論している動画でした。話題になっていたと思います。そこで『三体』についても触れられていて「SF が SF ではなくなってきている」と言う話がされていました。現実が SF に近づいている、と言うことでした。
D：独裁者は、おそらく週刊誌よりもそういった SF の方が怖いんじゃないかな。本当に社会にワクチンを与えてしまうから。そんな感じがします。
B：「日曜日に集まっちゃだめ」というのは、教会関係なんでしょうか。
D：中国の？
B：いや、『動物農場』で。
D：あー。
B：ナポレオンが「これからは日曜日に集まってはいけない」と言いますよね。これはキリスト教関係なのかなと思いました。

D：そうなのかね。なんだか「集会の自由」とかでしょうか。今、中国共産党は、コロナをいい機会だと思っていて、「3 人以上集まってはいけない」と言っているらしいです。香港の知り合いが言っていました。そうなると、教会とかはもう全然立ち行かない訳です。警察に捕まってしまいます。彼らはコロナだコロナだって言うんだけど、実は「集会・結社の自由」というのを壊したいらしいです。実際、うまくいっています。そういうのもあるかもしれませんね。
E：キリスト教関係でいうと、カラスが出てきますよね。ユートピア思想をもっているカラス。それがロシア正教会の神父を象徴しているんじゃないかという解説を読みました。
D：それは知らなかった。
E：モーゼスは、いることを許されています。人間側、ジョーンズと一緒にいなくなったけれど、しばらくしたら帰ってきて、働かずに動物たちにユートピア思想を説きました。自由に過ごしてもいいとなりました。自由に食べてもいい。その存在感って、ロシア正教会のスタンスと同じだったのかな、と疑問に思っていました。今までの話と合わせると、興味深いなと思いました。
A：モーゼスもそうですが、モリーはなんでしょうか。
B：あー。
E：一番好きなのはモリーでした。
D：モリーね。
A：途中でいなくなって人間と仲良くなって…。
C：すごくリボンのかわいいこですよね。今どきというか、こっちが無理だからあっちにいきます、というような感じです。私の好きなものはここにはなかったし…とはっきりしているイメージです。
B：なんか戦いの時に逃げてしまって、藁の中に頭を突っ込んでいたんですよね。
A：一人で、人間からもらったリボンを隠し持っていました。追放されそうになるけれど、自分からいなくなる。
E：そう。自分でいなくなる。そしてお砂糖をもらってかわいい小屋にいる。
B：お砂糖、あったね。
A：最初から、「ばかで白くて綺麗なメスウマ」とあるんですよね。
C：すごい表現。
B：はっはっは。
E：「ばかで」とはなかったです。
C：漫画でもなかったです。
B：動物の例えをうまく使っているなと思いつつ、そこまで深読みしてはいけないんだろうなとも感じました。例えば「羊」って一般的にキリスト教徒の例えじゃないですか。それが常に「よつあしいい！ふたつあしだめ！」って言っているんだけど、それって関係ないんだろうなと思います。
D：うんうん。
A：ばかな、無知な、盲目なものの例えとしては機能していますよね。
B：そうなんでしょうね。盲目で権威に従ってしまうということを言ってますね。
E：羊は、共産党のコムソモール？、青年団みたいなものを念頭においているんじゃないか、と読みました。
B：羊たちが。15 分叫び続けているとかすごいですよね。

E：そうそう。
B：だってもう議論できなくなるもんね。
E：私もそこ好きでした。15 分間言い続けるって…典型的というか。
A：そうですね。岩波文庫の羊がひらがなで叫んでいるのは、やはり名訳ですね。
B：でも、Amazon のレビューとか見ると「何でひらがなにするんだ」とか書いてありました。読みづらいって。僕は全然読みづらくなかったですね。
A：もちろん、早川も、盲目な感じ、おばかな感じというのはちゃんと書かれています。
E：英語でも語彙がとても優しくて。わからない単語はなくて、中学生高校生くらいだったら全部わかるんじゃないかという平易な言葉で書かれているんです。
B：だとしたら、D さんがいうように、日本語にしたほうが難しいのかもしれないですね。
E：最後の、七戒の変え方ですが、「more equal」なんですよね。
D：あ～。
B：へー面白い。解説を読んで「あぁ」と思ったんですが、風車建設計画あるじゃないですか、あれって僕らが歴史で教わる「五カ年計画」なんですって。ロシアの。昔ありましたよね。ソヴィエトといえば「五カ年計画」でした。丸暗記した覚えがあります。実際に何回も失敗しているんですよね。「第二次五カ年計画」とか。
D：「共産主義の挫折」、ということでは、毛沢東も似たような…毛沢東も詳しくはないんだけど、彼もひどいじゃないですか。大躍進政策。1000 万人以上死んでいるっていう説もあるって。餓死で。だから、同じようなことなんだろうなと思います。「共産主義」っていうものが必ずこうなるということではない。訳者解説にも書いてありましたが、この本を「だから共産主義はだめなんだ」というように読むと、それは誤読だと。なぜなら、オーウェルは共産主義者だからです。あらゆる革命が内包する、構造的なアキレス腱があるということです。河合隼雄だったかが言っていたことなんですが、フランス革命・全共闘、それらの反動運動って、その反動しているものに、皮肉にも似てくるっていう。河合隼雄は、心理学の投影の理論から言うんです。確かにそうなんですよ、赤軍派の内ゲバとかそうですよね。フランス革命も、王政という不平等を無くすと言ったのに、ジャコバン派が不平等になった訳です。自分たちが打倒したもの以上に独裁化してしまうということです。これってやはり矛盾だなと思います。朝日新聞というと「反権力」って言いますよね。でも朝日新聞社の社内ってどの新聞社よりもヒエラルキー構造が強くて、権威主義的だとか。それって皮肉な話ですよね。すごく家父長制的でっていう話があって、面白いなと思います。
C：一人の人間でもそうですもんね。虐待を受けた子どもって必ず自分の子どもにも虐待するじゃないですか。そういうふうに教わってきたとかそういうにされてきたことが、一つの家庭や一つの個人でもそうしてしまう部分があったり。国もそうなんですね。私は豚が最後人間みたいになって終わったのが嫌だなと思いました。でもいつか死ぬから、人間になった豚が死んだ後にはどうなっちゃうのかなというのはすごく思いました。
B：人間になるというか、豚と人間が全く見分けがつかないという話なんですよね。元々は「人間こそが悪の元凶なんだ」と言っていたのに、もう変わらなくなってしまう。豚が二本足で立ち上がったりしている。漫画はそこのあたり描いていなかったですよね。結構前の方でナポレオンが二本足で歩き始めていました。

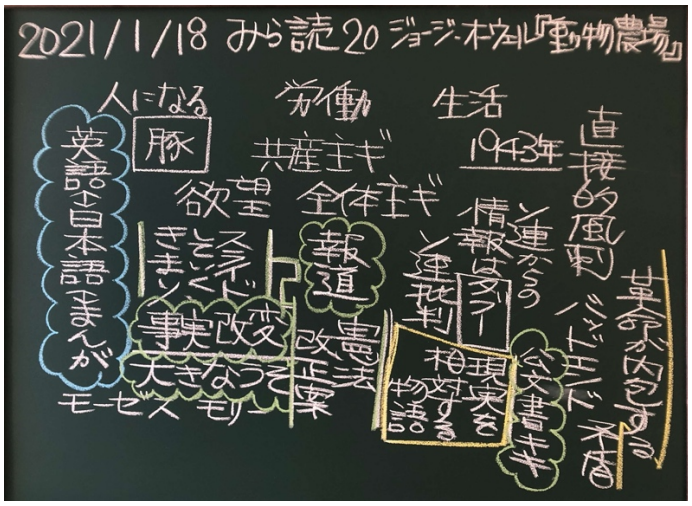
C：ビールをこうやっていました。
B：七戒を変更する前から二足で登場していたから、あれーと思いました。原作では、二足で歩いていることを見た時の動物たちの衝撃っぷりがすごいんです。漫画はその辺りがすぽっと抜けてしまっていますね。そういうのがあって、最後に動物たちが家の中をのぞいている、そして豚と人間がビールを飲んでいる、変わらなくなっている。喧嘩をしている理由が、トランプで誰がどのカードを出したのかなんですよね。実際に本当にあった、テヘラン会談という…。
D：あー。資本主義と社会主義の。
B：イギリスの首相とソ連のこの人が会談した話を、オーウェルはギリギリで差し込んだらしいです。
C：へー。
D：そこまでのものがあるとは。この小説において人間というのは資本主義陣営のメタファーですもんね。資本主義なんていうものはクソだ、というところから、皮肉なことに幹部たちは資本主義と手を組んで利益供与をしている。
B：豚がミルクを飲んでいる理由が、豚の健康維持のために必要だ、というのもめちゃくちゃ笑いました。
D：今、公文書危機というのがあるじゃないですか。毎日新聞、昨今の森友での文書改ざんとか。彼らが改ざんをした末に行き着いたのは「そもそも文書を作らなければいいんだ」というところです。それってまさにナポレオンたちと同じです。残すからだめなんだ、残すから「改ざんされた」とか言われるんだ、って。そんなロジックになっていて、日本も相当にやばいところまできていると思いますね。
E：ファイルを燃やしますもんね。
C：すごいですよね。だってこんなことやってもいいと思っている…その考えがすごいですよね。
D：すごいよ。
C：いつかバチが当たるとか思わないんですかね。すごいというか、うらやましい。
A：バチが当たるからやっちゃだめなんですね。
C：そう。お天道様が見てる。「ロクな死に方はしない」とか考えないんだ、おかしいなぁと思っています。
E：何十年も前から変わっていないですしね。
B：これって、ナポレオンがスターリンだから、つまり「一国社会主義」の思想なんですよね。でも追い出された方のスノーボールの思想は「世界革命」なんですよね。そっちがそのまま追い出されなかったらどうなっていたかというのは興味があります。漫画の方が対極的に描かれているけれど。スノーボールがずっとリーダーだったら違っていたのかなって。なんとなくトロツキーの本を読みたくなってきました。スターリンではなく。そろそろ、次のものを選びましょうか。
A：そうですね。
B：すごく面白かったです。
C：面白かった。
B：めちゃくちゃ面白かった。
A：名作ですね。
C：いろんな解釈ができていいですね。ん？色んな解釈をしたらだめなのかな？
B：いいと思いますよ。ふふふ。

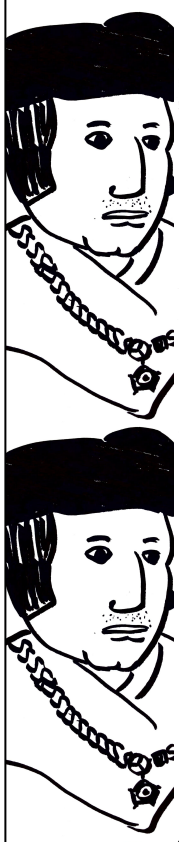
D：村上春樹の『1Q84』って、ジョージ・オーウェルの『1984 年』のオマージュですよね。あれのリトルピープルとか、ビッグブラザーとか。ビッグブラザー、『1984 年』が元ネタです。ビッグブラザーの時代というのが、ソ連とか、アメリカのレッドパージ、赤狩りとか、そんな時代ですよね。だとしたら、21 世紀の独裁は、リトルピープルっていう形をとって現れるんだっていうのを村上春樹は言いたかったんですよね。
B：それにオウム真理教の話もあるんですよね。
D：そうだね。
B：組み合わせてっていうか。
D：『リトルピープルの時代』という本があります。宇野さんです。それって仮面ライダーの話なんです。つまり石ノ森章太郎ってことじゃないですか。なんだかつながっているんだなと思います。仮面ライダーって、ショッカーに改造された人が、ショッカーと戦うという話です。あの辺り、石ノ森章太郎とか、ウルトラマンの円谷さんとか、あの人たちって、戦時中に作りたくない戦意高揚映画を作らされていた人たちです。だから、戦後、ものすごく屈折した形の権力批判としてウルトラマンなんかを作っています。
B：ゴジラとかね。
D：あの辺の流れにすごく興味があります。
B：『キャシャーン』も石ノ森章太郎じゃなかったっけ？
D：わからない。
B：『キャシャーン』は宇多田ヒカルの元旦那さんが映画化した…、あれもすごく悲しい話なんですよね。
A：次はどうしましょうか。
B：前回出たのはトマス・モア『ユートピア』でしたね。
C：『ユートピア』…『ユリシーズ』とごっちゃになっています。
B：『ユリシーズ』は無理無理。
C：「あの長いやつ、無理」とか思いました。
D：『ユートピア』、読んでみたいですね。
B：でもまたイギリスになっちゃいますね。こないだ、参加した人が言っていた『源氏物語』。すごく気になって買いました。
E：それで全部？
B：これが 14 冊あります。
E：そうですよね。
C：そうですよね。ずいぶん短いなと思って…。
B：でも、色々な訳があって、瀬戸内寂聴さんのものが有名だったりするんです。『源氏物語』は長すぎて難しいかな。イギリスから出るなら、コンラッド『闇の奥』という本も。
A：知らない。
B：これって、イギリスから船で出ていく話なんです。象牙貿易で、アフリカのコンゴを植民地化したところを追っていくという話です。まさにイギリスからアフリカに船出していくからちょうどいいかなと。これだけ長くイギリスに停滞したから。『ユートピア』でもいいんだけどね。

A：イギリスはいくらでもありそうですよね。
B：そうなんだよ。ダイレクトに『やし酒飲み』に行くよりは、一旦何かの理由をもってイギリスを抜けるか、それか『ユートピア』に行ってから抜けるか。
A：『ユートピア』に行くってどうですか？
B：いいですよ。
A：ヨーロッパ最後に『ユートピア』。
B：これって小説というよりは、説明なんですよね？
A：そうなんだ。
B：この国の制度はこうでこうで…というような。
A：私は中公文庫か何かを…。
B：あれに近いですよ。『ガリヴァー旅行記』が『ユートピア』を参考にしているんですよね。元ネタ本みたいな感じです。
E：ラテン語なんですね。
B：ん？
E：ラテン語で出版したんですね。
A：へ〜。
B：でもすごい昔でしょ。
E：1516 年。
B：当時は本は全部ラテン語じゃないですか。ほとんど全部。今までと違って小説っぽくはないでしょうか。小説っぽい方がいい？
A：確かに、小説じゃなかったとしたら、今までの流れからは違いますね。
B：多分、『ガリヴァー旅行記』に近いから、なんとかの国を見たらこうでした、というような話だと思います。あんまりずれてはいないと思います。結構厚いですよ。200 ページくらいある。
C：あー。
B：でも読みやすそうですよ。『ガリヴァー旅行記』と同じ訳者だし。
A：平井正穂さん。私はすごく信頼しています。
B：平井さんね。うんうん。『世界文学案内』という分厚い本を買ったんですけど、それのイギリスのところは全部この人でした。コンラッドもすごく有名らしいから、次の次でも、いつか。
A：イギリスから出るにはいい小説ですよね。
B：そこから『やし酒飲み』じゃないですか？
C：ふふふ。
B：そしてそこから南米に入る。
E：おー。
A：実は、今、「読書マップ」というのを作ろうかと思っていて。画面共有できていますか？
D：すごい。
B：面白いね。
E：「英雄と伝説」、面白いですね。
C：この数字は何？

B：1 回目、とかですよね？
A：そうそう。
B：A くん、一回どこかで番外編として、これを語るのをやったらいいと思います。なんであれが 1 回目なんだっけ？とか。
C：確かに。あれ？1 回目ってなんだっけ？
B：1 回目は梶井基次郎の『檸檬』じゃないの？
A：いやいや、その前がありますよ。
B：え？
A：『変身』ですよ。
C：あー。
B：そうだそうだ。なんでカフカ『変身』から梶井基次郎に行ったんだっけ？
A：私たちは世界文学を世界地図で見ているじゃないですか。「旅をする」って言っているように。でも両軸必要かなと思ったんですよね。そしてどんな足跡を残しているかっていうのを見たら面白いかなと思いました。
B：面白い面白い。今度語ろうよ。これを。
A：古典を読むって、こういうことを大切にしたいですよね。
B：やはり 1900 年代が多いですね。
A：特に日本文学となると 1900 年代が多い。
B：それはでも芥川をやりすぎたからですよね。
A：それもありますね。
C：確かに。全然抜け出せなかった。
B：もし『源氏物語』なら一番左ですからね。
A：古いと、地域ごとに分かれていないですよね。
B：これが？
A：紀元前に書かれている文学って、地域性がそこまで関係ないというか…。
B：11 ってなんですか？
A：『オイディプス王』です。
C：あー。
B：『オイディプス王』かー。
A：これ。『世界文学大図鑑』。これのシェイクスピア版を B さんが持っていましたよね。
B：それも持っているけど。
A：これを横軸の参考にしました。一年を終えて、区切りはないんですけど、こんな振り返りもいいかななんて考えていました。
B：とりあえず『ユートピア』ですね。
A：日程ですね。どうしましょうか。
B：思ったんだけど、これって 2 週間で読める？
C：読めないですよ。
D：そうだね。

B：来年度から、月一にしてもいいんじゃないかって思っているんですが、どうなんでしょう。
A：どうでしょう。
D：うん。
B：もう新しく入ってこられないよね。膨大な読書量の人じゃないと。
A：そっかそっか。
B：今年度は任せるけど。
D：長めの本だったら 3 週間 4 週間空けたりしたらいいんじゃないですか？
A：来年の話が出ましたが、「月のはじめの月曜日」とか決めたほうが予定しやすいんでしょうかね？やりにくいとか。
B：月一くらいの方が読書会はじっくり読めるかもしれないですね。
A：本の選定が難しいですよね。
B：とりあえず次にいきましょう。
A：2 週間あけるとすると…。
B：2 月 1 日ですかね。
A：どうでしょうか。
…
A：では、2 月 1 日の 16:00～17:00 ですね。
B：今年度は、アフリカに行って南米に行って終わって、A くんのさっきやったやつでざっと振り返ったらいいんじゃないですか？アメリカ文学に行ったらまためちゃありますよね。それか、南米に行く前に終えるか。
C：ヨーロッパで。
B：アフリカまでは行って。3 月くらいまでにこれやりましたねって回をつくれば、新たに入ってくる人もいるかもしれないですね。
A：読書マップを見つつ、次に行くところを選べると面白いかなとも思いました。
B：なんとなく進んでいって、振り返ってみてこうだったということでいいんじゃないですか？
A：そっかそっか。
B：それを年度でまとめて見てみて、来年度ここ行きたいねとかはあっていいと思います。
A：そうですね。では次はとりあえず 2 月 1 日の 16 時、トマス・モア『ユートピア』でお願いします。

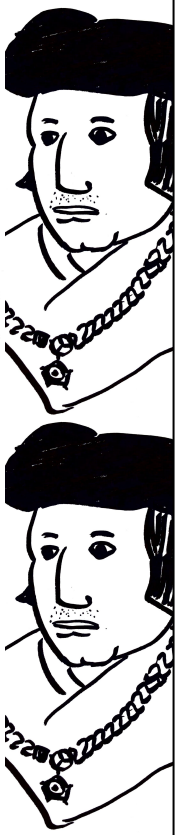




みらいつくり

第21回 読書会

@zoom



【日時】
2021年2月1日(月)16:00～17:00

【課題図書】
トマス・モア『ユートピア』

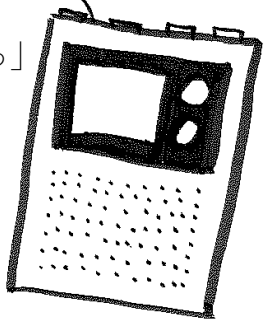
【参加方法】
興味のある方は、以下事務局までご連絡ください。
zoomのアドレスとパスワードを添付して返信いたします。

事務局：みらいつくり研究所　松井
Eメール：matsui-ka@kjnet.onmicrosoft.com

「ラジオ参加」も大歓迎！

「ちょっと議論には加われない」「その時間は作業しているから」
そんなみなさんにおすすめの「ラジオ参加」。
zoomのカメラをオフにして、ラジオみたいに聞き流す。
そんな「学び」があっていい。そんな「参加」があっていい。
興味のある方はぜひ事務局にお問い合わせください。

みらいつくり大学校企画



みらいつくり大学校企画

第 21 回みらいつくり読書会@zoom 記録

第 22 回は、2021/3/1 の 16:00～17:00 に行います。興味のある方は下記事務局までご連絡ください。

事務局 みらいつくり研究所 松井

E メール：matsui-ka@kjnet.onmicrosoft.com

【課題図書】	【実施日時】	【参加者】
トマス・モア『ユートピア』	2021/2/1 16:00～17:00	A,B,C,D,E(＋ラジオ参加 1 名)

内容（※語尾を中心に編集しています）
A：今日は『ユートピア』ですね。思ったよりも長かったですね。 B：長かった。 A：早速ですが、みなさんはどの訳を読んだでしょうか。岩波が多いでしょうか。 B：何種類かありますか？ C：岩波です。 D：僕は中公文庫です。 A：私も中公文庫にしました。 B：中公文庫から出ているんだ。 D：「改版」とあります。 B：分厚くないですか？ A：厚いかな？ B：岩波はこれくらいです。 D：訳注が５０ページくらいありますね。 B：こちらはほとんど訳注はないです。数ページです。…そもそも訳注ではなく原注でした。訳注はないんですね。 A：ちなみに E さんはどんな感じですか？ E：私はオーディオブックで、英語版で聴いたんですけど、誰が訳していたのかとかはわかりませんでした。3 時間 51 分でした。 B：英語版って何で聴いているんですか？オーディオブックって。 E：マイブック・パブリッシングハウスってところが出しているんですけど、iTunes から落としました。 B：iTunes ね。Youtube でも古典ならありますよね。 E：でも Youtube では断片的になっていたんですよね。 B：『アニマル・ファーム』も『ユートピア』も、全部 3 時間 4 時間くらいでありました。なんでもありそうでしたよ。大体。有名なやつは。 E：へー。いいですね。今回はそうやって購入したんですけど、ラテン語から訳した人も誰かわからないし…っていう感じですね。 B：Youtube だと基本的に無料ですよね。 E：そうでしょうね、きっと。ちょっと今度は Youtube で探してみます。でも Youtube だと Wi-Fi がな

いとだめですね…。
B：そっか。
A：中公文庫には、「ラテン語から訳したものが日本にはない」「英語からの訳しかない」というようなことが書いてありました。そんな問題意識があって、ラテン語から直接訳したみたいなんです。
B：それを新版としたんですね。
A：改版でしょうか。
B：でも改版は第 2 版ということじゃないかな。
A：そうなんでしょうか。元々は『世界文学全集』に載っていたものを、文庫にしたと書いてあったような…。
B：はいはい。中公といえば『世界文学全集』ですよね。へ～。そうなんだ。
A：みなさん読めましたか？結構厚かったですよね。
B：C さんは例のごとく読んでないですか？
C：それが、自分がどこまで読んだかわからなくて。
B：どういうこと？
C：なんか、今回私も進化をして。まず、札幌市図書館の電子書籍でかりたんです。なおかつ読み上げ機能があるので、…。これで読んでくれるんだけど、自分がどこまで読んだか全然わからない。…。
B：なんだかモヤさま風の読み上げですね。
C：（読み上げてくれる）この人、機械だから、たまに変な表現をするんです。
E：そうそう。
C：だから、どこまで読んだからわからないけれど、なんとなく…。
A：「この人、機械だから」ってすごいですね。
C：はっはっは。
B：人じゃないからね。
A：今日は、あらすじを紹介する必要ないかなと思いつつ、全体の流れとして、私が不安なところがあるので確認をしてもいいですか？「こんな構造かな」と私は思ったものがあるんですけど、共有させていただきます。
B：はい。
E：すごい。
A：まず、始めに「詩と書簡」があります。
A：あれ？まず「ユートピアに関する詩と書簡」から始まっていますよね？
B：第一巻としかないですね。
A：それが違うのか。中公文庫にはそれがたくさん入っています。だから長いんですね。
B：詩と書簡、があるんですね。
A：「ユートピアに関する詩と書簡」として、『ユートピア』を読んで色々な人たちがやりとりをした手紙や影響を受けてつくられた詩が書かれているんですね。
B：最後に、トマス・モアからピーター・ジャイルズへの手紙、というのは入っています。それは作品の中でしょうか。これは作品の一部ですよね。
A：そうですね。私は、この最初の部分、最後の部分が作品の一部かどうかわかりませんでした。

B：はいはい。
A：「詩と書簡」の部分が特に。
B：おそらく、作品の外部だと思います。
A：そもそも、作品の外部かどうかを曖昧にしている、そこがこの作品の面白さかと思いました。詩と書簡に関しては、ついている本とそうでない本があるようです。第１部では、モア（私)、ピーター、ラファエルが、会話をしています。あっていますか。
B：あってます。
E：そうです。
A：そして、主な内容は、ラファエルにイギリスで議員として働くように、と勧めている。
B：もう忘れた…。どんな感じだったかな。
A：ラファエルは、それは嫌だ、と断り続ける。だったら、あなたの話している「ユートピア島」についてを教えてください、となる。ラファエルはそれならいいでしょうと答えて語り出す。ラファエルの語ったことをモアが聞き取って書いているのが第二巻。ですよね？
B：一巻でもある程度話していますよね。ユートピアについて。こういう話をしました、というまとめではありますが、ユートピアについて話は入っています。
A：そうですね。話してはいるけれど…。
B：もうすでに第一巻から始まっていて、なんで一巻と二巻を分けたんだろう、と思った記憶があります。主題ではないかもしれませんが、もうすでに話していませんでしたっけ？誰か他の人どうですか？
E：全然聴き取れずわかりませんでした。
C：ね。
B：第一巻では全く話していないんでしたっけ？
D：出てきているよ。
A：全くではないですね。
D：出てきているね。
E：うん。
B：さわりの部分を話して、本格的な話を聞くのが第二巻。
A：そう。
B：その構成がまた不思議だなと思ったんです。
A：で、最後に、モアがピーターに宛てた手紙がつけられている。それでおしまい。
B：そっか、このピーターって第一巻に出てくるんだ。
A：かと思っていましたが。第一巻で話しているピーターのことかな？と思っていました。
B：本当に外国人の名前は頭に入らないです。誰かとかがイメージできない。ピーターって出てきたっけ？…いたいた。そういう構成にしているんだ。最初の「詩と書簡」は誰が書いているんですか？
A：「詩と書簡」は、色々な人たちです。最初にはエラスムス。
B：有名ですね。人文学者。
A：その人かわからないけれど、そういう人。１ページ、２ページとかいう書簡がたくさんついている。
B：それって多分出版されたユートピアに対するいわゆる献辞じゃないけれど、この本は面白いよということじゃないですか？

A：うーん。
B：作品とは全然別だよね。
A：ただ、トマス・モアがピーターに挨拶、というのもあるんです。
B：それってジャイルズのことですよね。それって最後の手紙じゃないんですか？
A：その前にもついているんです。
B：そうなの。
A：「詩と書簡」の中にもあるんです。
B：ピーター・ジャイルズは実在の人だったんでしょうか。
A：それがわからないんですよ。
B：ラファエルは実在の人？
A：実在じゃないと思って読んでいるんですけど…。
B：ふふふ。ピーター・ジャイルズまでは実在なんだろうか。
A：だから、すっかり「詩と書簡」もトマス・モアの創作なんだと思っていたんです。
B：調べると…ピーター・ジャイルズは実在でエラスムスの友人、とありますね。
A：あ～。
B：実在ですね。ラファエルは、モアの創作みたいです。
A：そうなの！余計に複雑だということがわかってきました。内容を押さえられたような、押さえられなかったようなですが、感想を話していきましょう。
A：今話をしていた通り、構造がぐちゃぐちゃだということから、読んでいて混乱しながらいました。私が読んだ本の訳者の澤田さんは、ラテン語から直接訳したけれど、実は大失敗しているんじゃないかと思いました。
B：澤田さんのせいなの。
E：ふふ。
A：だから、正穂さん。
B：岩波のね。
A：私は正穂さんを信頼していたので、あっちにすればよかったーと思いました。
B：なんでそっちにしたの。
A：最初、あっちの方が簡単だったんじゃないか…と思ったんですが、だんだん面白くなってきて、第二巻はとても楽しく読みました。
E：ふ～ん。
A：何が面白かったかというと、構造の話もそうなんですが、現実をフィクションがもうごちゃごちゃになっているところです。それが『ユートピア』の面白いところだなと思ったんです。読んでいる方もぐちゃぐちゃになっていく。どこまでがユートピアのことか、どこまでがユートピアのことじゃないのかがわからなくなってくるなぁと思いながら読みました。第二巻に書かれているユートピアに関しては、『ガリヴァー旅行記』を思い出しながら読んでいきました。最初、『ガリヴァー旅行記』の最後の島…。
B：フウイヌムね。
A：そう。フウイヌムと一緒で、最初は「ここはいいところかな」と思って読み始めました。やはり、

だんだん嘘っぽく感じてくる。いいことを言ってそうなんだけれど、実は矛盾をはらんでいる。戦争を絶対にしない、でも戦争をしないための戦争ならする、ということが書いてある。政治についても、死についても、宗教についても。色々な宗教が認められているけれど、唯一の宗教に合一しつつある、とか。やはり、理想のように書いてあるけれど、そこには矛盾がある。最後の方になって、「公共の福祉」というのが出てきます。宗教のところで、「公共の福祉が何よりも優先される」とありました。こないだ D さんが触れていた日本国憲法の…。

B：改正案ね。

A：そう。草案。それを思い出して怖かったです。公共の福祉って聞こえはいいけれど、最初はいいんだけれど、よく考えると怖い言葉です。これはユートピアについて書いてあるんだけれど、実は理想の場所ではないんじゃないかと最後には思うようになりました。解説を読んでみると、ユートピアという言葉の意味は「ない所」であるとありました。こんな理想なんてありえない、ということを主張しつつ、イギリスの国の状況、当時の現実世界をいかに相対化するかという目的のために、物語として書かれているんじゃないかと思いました。D さんが前にも言っていた「物語の意味は、現実を相対化すること」、を思い出して、その通りだなと思いながら読みました。ディストピア小説、『1984 年』もそうだし『動物農場』もそうですが、『ユートピア』はそれらとは逆なのかなと思っていましたが、行き着くところは一緒というか、私が感じたことは一緒でした。そこも面白くて、夜中に読み終えましたが、一人高まった状態でした。みなさんいかがですか？最近、C さんから話していただくことが多かったので、みなさんのを聞いて最後に C さんにお願いしてもいいですか？

B：ラディカルな C さんは最後に。

C：大したことしゃべれないから一番最初の方が楽なのに。

A：あ…。こないだ文字起こしをしていて、「私ばっかり最初じゃないですかー」って言っていたから…。

C：言ってましたか。でもいいです。本当にペラペラの感想ですから。では私から。

B：結局先なんだ。

C：だって、すごいことをみんなしゃべりそうだから。これはやばいぞと思って。

B：どうぞどうぞ。

C：ありがとうございます。私は、どこまで読んだかわからないんですけど。

D：ふふふ。

A：ははは。

B：はっはっは。

C：ですけど、これを作っているトマス・モアはすごく楽しかっただろうなと思いました。

B：お～。

C：だって、自分で、想像しながら法律とか国のこととか、宝飾品をこうゆう使い方をしたらみんな平等に感じるんじゃないかと考えながらいたと思います。つくっていた時、私たちの世代でいうと、ドラクエとかファイナルファンタジーとかを一番最初に作っている人たちの気持ち、開発者の気持ちだったんじゃないかと思うんです。すごい色々な空想、この島はこんなもので、あの川はこんな感じ、あの街はこんな感じで、ってすごくワクワクしていたんだろうなと思いました。どこまで読んだかわからないけれど、読んでいて、聞いていて思いました。すごく面白いと思ったのは、金とか財宝の扱い方

です。私が経験したり学んだりしたことのある感覚ではありませんでした。金というものに対して、牢獄にいる人につけたりする。他の国においてはものすごく価値のあるものだけれど、実際、銅とか鉄じゃないから、それだけで使うことはできません。そんなことを考えると、金ってそんなに価値のあるものではないんじゃないかと思いました。むしろ、そういうものじゃない方がいいというのは、宝飾品に対する価値観が面白かったです。以上です。
B：結構読んでるね。
A：C さん、半分以上読んでますよ。
C：本当？、半分以上いってる？えーそうなんだ！
B：ふふふ。
C：え～すごい！
D：読み終わっている可能性もあるよね。
C：はっはは。
A：ふふふ。
B：はっはっは。
D：自分で気がついていないだけで。
B：確かに確かに。
C：確かに。これのすごいところは、茶碗洗っていても、洗濯をしていても、最悪歯を磨きながらでも、勝手に読んでくれるんです。
B：そうだよね。
C：そう。なおかつ、枕元で勝手に消えるんです。旦那が消したんだと思うんですけど。だから勝手に進んでたっていう。どこまで聴いてたんだっけっていうのはあるんだけど。
B：多分、消してくださったんじゃないですか。
C：消してくださっている…。
B：勝手に消えるんじゃなくて。本人が気がついていないわけだから。
A：まさに、フィクションとの境目がなくなるというトマス・モアの思惑通りですね。
C：うん。このシステムいいなと思っています。そう思いました。
E：私も実は今回何かしながら聴いていて、ほとんど耳に入っていないっていう。断片的に聴こえてきた描写が面白いなって思っていました。朝に勉強会をする、講習会みたいなのが用意されているとか。みんなが職業を選べて勤勉だというのも、これいいなと思いました。住みやすそうだなと思ったんです。でも中途半端だなとも思いました。ユートピアっぽくない、理想郷っぽくはないんだなと。1516年っていう時代的背景があるのかもしれないけれど、奴隷制度があったりとか、男女の関係性がどう見ても差別的だったりとか。あとは…ちょっと忘れましたけど。病気の人の話が出てくるんですよね。障害の話は出てこない。時代的なことはあるんだろうけれど、せっかくどこにもない国をつくる、捻り出したんだとしたら、中途半端かなと思いました。パスポートの話も、どうしてこんなことをわざわざ書く必要があるのかなと思う描写が多かったです。個人的にはそう思いながら聴いていました。
B：障害の話って出てきていますよね？
E：ありましたっけ？
B：なんだか、奇形の人は～とかって出てきたと思います。

E：そうですか。私聴き逃しているんですね。どんな感じなんですか？
B：えっと、そんなに…結婚のくだりのところで…。
E：ふ～ん。
B：結婚したけれど、奇形があるからやっぱりとかいうことは許されないとか。そもそも、奇形がある人とかを笑うことを最大の恥辱であるとあります。笑われた人だけではなく、笑った人も不名誉であると。どうすることもできない身体上の欠陥を、あたかもその人の罪であるかのように咎めることは、人間として不謹慎の誹りを免れることはできない。って書いてある。
E：面白いですね。
B：だから、割とラディカルですよね。当時から考えると。
E：そうですね。聴き逃していましたけど、それは面白いですね。ありがとうございます。
D：…大丈夫ですか？
A：動いているかな？
D：あまりネット環境があまり良くない…？
C：動きました。
D：ガリヴァーの元ネタとして読みました。途中から、乱暴に読みました。速読を普段はしないんですけど、結構雑にパラパラパラと読みました。だから、あんまり意味が把握できているか自信がありません。
B：ふふふ。
D：早く解説が読みたくて。早く！って。急いで読みました。読みながら、思い出したことが２つありました。一つ目はキブツ共同体です。イスラエルにある、なんだっけ？アブラハム…なんとかって人が作った？ルーツは共産主義なんですね。そういうものを思い出しました。理想の共同体を作ろうということですよね。今もあるんでしょうか。私有財産がないコミュニティで、みんなの子どもをみんなで育てるといったようなこともやっている。結構そのルポを書いている人もいて。日本でも、ヤマギシ会とかあるじゃないですか。ああいうのも、キブツを意識していると思います。そんなキブツを思い出しました。もう一つが、トクヴィルの『アメリカの民主主義』ってあるじゃないですか。めちゃくちゃ有名な。トクヴィルはフランス人かな？新大陸アメリカに行ったら、こんな社会制度で、だからアメリカって成長しているんだというようなこと。それを旧大陸の人に教えたんですよね。古典中の古典です。それも思い出しました。似ているんです。形式が。この社会ではこうなっているこうなっている。我々、旧大陸ではこうだから、学ぶべきだというようなことです。そういう語り口が似ているなと思いました。僕は、あとがきは、しっかり読みました。Ａくんも言っていましたが、ユートピアって理想社会と勘違いしている人が多いけれど、そうじゃない。それは誤解だと。よく理想社会であるとして引用する人たちが用いるところって「一日６時間労働」の部分なんだって。で、「『ユートピア』という古典に、１日６時間労働、ということがある」と。そんな文脈で引用する人は、「ユートピアは理想郷だ」という理解をしている。でもそうじゃないんだ、と。「社会の最善政体」、最善な政治システムということと、「ユートピア新島」が、ラテン語で、「すなわち」ではなく、「そして」という助詞で結ばれていることが重要であると。ユートピアというのは社会の「最善政体＝」ではなくて、社会の最善政体を考える上で、ユートピア新島を、補助線にして考えようということを、モアは言いたかったんだと。あとがきに書いていました。なるほどなと思いました。この本書の大黒柱は「無」であると言

っています。澤田さんは。ユートピアとは「無いところ」という意味だから。その島の目撃者であるヒュトロダウスは「うそ博士」という意味なんだって。だから、そもそも無いものというものを論じている、トリッキーなことをしている。僕は、なんとなく、虚数のことを思い出しました。数学でありますよね、二乗するとマイナスになるってやつです。i で表される概念です。なんとなく、虚数解のようなものなのかな、と。ユートピアって。本当は理想社会っていうのは、私たちが生きている世界では、多分、語義矛盾というか、そもそも、理想社会への試みというのは、必然的に挫折するということが知られているから、無い場所としてユートピアを言った。「あえて考えるとしたらこうなるかもね」、ということを、虚数解のようにして示すことで、我々の住む実数の世界に生かすことができないか、と考えたのが、トマス・モアなのかなと。それが思ったことでした。そんな感じです。

B：僕も D くんと一緒で、早く終わらないかなと思いながら読みました。読書会、大体面白いんだけど、今回はめちゃ辛かったです。読書会は小説を読むもんだという頭があります。だから…、小説っぽくないじゃないですか。架空の国の説明みたいだったのもあります。あとは、これを元ネタにしている『ガリヴァー旅行記』を先に読んでしまったから。フウイヌムの感じも、ここに元ネタがあったんだなとか、あとは手紙が後ろにあるとか、現実とフィクションの境目がわからないとかいうことも、全部『ガリヴァー旅行記』に取り入れられてしまっていますよね。

A：確かに。

B：まあ、こっちが先なんだけど。それをスウィフトが取り入れた、そして小説っぽく組み込んだ。『ガリヴァー旅行記』を先に読んでしまったからか、うーんって感じでした。あとは、今年度、僕は、理学療法学科とかに放射線技師学科で、生命倫理という授業を教え始めたんです。その中で、安楽死の問題があるんですよね。そこでこの本が出てくるんです。安楽死を、取り上げた本、最古ではないだろうけれど、トマス・モアの『ユートピア』でも安楽死について触れられている、とあるんです。確かに、第 7 章にあるんです。これ以上長く生きない人がいて、その人がいわゆる死ぬことを選んだら、ということです。そうやってすすめるんだ、と書いてあって。「ここのことなんだ」とは思ったけれど、「ああそうなんだ」くらいでした。面白かったのは、結婚する条件の話。結婚前にお互いに裸で、互いを見る、とあります。

C：そんなのありましたっけ？

B：あるんです。それが面白いというのもあるんだけど、その後に結婚したんだったら、文句は無しね、という感じなんです。あなた、結婚する前に全部確認をしたじゃないですか、と。結婚した後に、基本的に離婚することは許されないわけです。よっぽど相手に問題がなければ。っていう、とてもカトリックちっくな、というか考えなんだけれど。さっき見たら、トマス・モアはヘンリー八世に徴用された人物なんですよね。ヘンリー八世って、いわゆる悪王と言われています。イギリス国教会として独立した原因を作った人なんだけれど。最初に結婚した人が、もともと自分のお兄さんの奥さんだった人。要するに、子どもを産めなかった、妊娠しなかったから、離婚しなきゃいけない。でもカトリックは離婚できないから。そもそも、カトリックの中で、自分の兄弟の奥さんを娶ることがゆるされていない？理屈を持ち出して、離婚しているんです。アンブーリンという、映画でいう『アンブーリンの姉妹』です。

E：観ましたー。

B：ナタリーポートマンがやっていた。ヘンリー八世は、自分の侍女と結婚したり、その後 6 回くらい

離婚しているんだけど。その時に、トマス・モアが反対したんだって。離婚は許されないって。カトリックの立場で。それで死刑になっています。
A：へ～。
B：モアがね。確かに『ユートピア』のなかで、結婚は神聖なものであるとされています。破棄できないとあります。それを地でいっていた人なんだなと思いました。そんなイギリスの歴史と重ねて読むと面白いなと思いました。あとは、シェイクスピアの作品で、トマス・モアについて書いた本がありますよね。
A：そうなんですか。
B：『サー・トマス・モア』っていう。多分このトマス・モアなんですけど。それを本で見つけることができなくて読めていないんですけど、それを読んでみたいなと思いました。多分、死刑になるところまで書いているんだと思うんだけど、シェイクスピアだったら…ちょうど 2 世代くらい前ですよね。1500 年代ですもんね。一つ上の世代だと思うんだけど、シェイクスピアは、この人物をどんなふうにみていたのかなと興味をもちました。っていう感じで、次の作品に取り掛かっちゃったから。
C：え、何？
B：次の作品を選ぶときにアツく語ります。
C：ははは。
B：『ユートピア』はこんな感じ。
A：はっはは。全然アツくないじゃないですか。
B：すいません。
A：お互いの話を聞いていてもそうなんですが、私は読んでいてシェイクスピアも思い出しました。当然、シェイクスピアもこの本を読んでいただろうなと思いつつ、この中公文庫のあとがきには、「この『ユートピア』は対話的な構造をもった芝居だ」とあったんです。
E：へ～。
B：そうなの？
A：はい。あ、それは本当に芝居としてやられていたというわけではなくて、澤田さんが舞台のようなものだと書いていたんです。
B：へ～。
A：それはさっき D さんが言っていた、現実を相対化するための物語という意味がある、ということだと思います。そんなことを読みつつ、シェイクスピアの舞台、演じることを通して現実をどのようにみるかを考えていったことと似ているよなと思いました。そんなことを感じました。みなさん他にいかがでしょうか。まだ、次回の作品に行くにはまだ早いような気がするのですが。
D：ふふふ。
B：すいません。やる気なくて。
A：ははは。
D：さっきのキブツ共同体はモーゼス・ヘスでした。
B：はいはい。
D：で、イギリスの話に戻ると。去年読んだ本の中に、『フランス革命の省察』っていうものがありました。保守主義の原点なんです。この本が。で、古典なんです。それが、誰だったけな。

B：エドマンド・バークじゃなくて？
D：そうそう。バークです。1790 年。結局、今の保守主義、コンサバティズムというものはここから始まったと言われていて。いわゆる進歩主義ですよね、フランス革命というのは。それを徹底的に批判したんですよね。伝統のもつ価値というものを言うんですけど。この本が、人生で一番読みずらかった本なんです。もうひどい。読みずらさが、ずばぬけている。
B：訳じゃなくて？
D：それは何かというと…。訳じゃなくて。手紙という体をなしているんです。バークが、フランスにいる自分の友人、イギリス人の友人に向けて書いている、という体をとっているんです。でもその友人は架空なのかな…その辺はわからないんですが。その体をとっていて、「フランスで起きたことについて僕は思うんだが…」と書かれています。手紙なんですが、ハードカバーの本で、章立てもなく 200 ページくらい続くんです。
A：ははは。
D：もう地獄なんです。本当に。苦痛でしかない。『カラマーゾフの兄弟』でも同じ人の話が 50 ページ続いたりしますよね。日が暮れているだろ、と思うんだけど。これは手紙だから。封書に入らないじゃないですか。明らかに。
A：もう立体になっていますよね。
D：もうありえないんですよ。
B：それ多分、動画で共有してほしいやつですね。
C：はっはは。
A：はっはっは。
B：「読めないから動画で共有して」って。
D：もうひどいんです。だから、手紙という設定を守っていないんです。そもそも長さが。そんな手紙あるかい！っていう。手紙という設定に縛られているから、章とかをつけられないんです。
A：はっはっは。
D：自縄自縛みたいになっていて。くそほど読みにくいんだけど、これが原典っていうから、一生懸命読んで。確かに学ぶべきものはいっぱいあったんだけど。言いたいのは、こういうことをイギリス人はしがちなのかなって。モアの『ユートピア』も、架空の対話という形を取りながら、自分の言いたいことを言うっていうか。大陸の、フランスとかドイツで、こういった類のものってあんまり僕は知らない。さっき言った『アメリカの民主主義』はちょっとそうだけど。別に、架空の対話という体はとっていない。イギリスの知性ってこういうやり口をしがちなのかなって思いました。イギリスって、経験主義っていうじゃないですか。大陸がなんだっけ。
B：大陸合理主義ね。
D：合理主義か。実念論と唯名論とかあるじゃないですか。そういうのでいうと、イギリスは、具体的個物にしか真実は宿らないと。観念みたいなものは軽蔑する。そうすると、対話という体を取らざるをえない。そんなことが関係しているのかなと思いました。
B：確かに、イギリス文学…イギリス人のメンタリティというよりは、イギリス文学の流れなんじゃないですかね。
D：あ～。

B：次にこれをって思っている本は、英語で書かれているからイギリスの文学の範疇なんだけど、書いている人はポーランド人なんです。
D：はいはい。
B：だけど、手紙とか、登場人物に聞いている話っていうことなんです。
D：そっか。
B：だから、イギリス文学でそんな流れが…。E さんの方が詳しいかもしれないけれど。
E：わからないです。ごめんなさい。
B：日本ってあまりね。
D：成文憲法がないじゃないですか。イギリスって。
B：うん。
D：で、コモン・センス。
B：コモン・ローね。
D：そうそう。コモン・ロー。じゃあ何に依拠するかというと、過去の具体的な事件、判例を根拠にするじゃない。それも、理念なんてものは信じないというもののあらわれなのかなと僕は思うんです。
B：うんうん。
D：ちょっと関係あるのかなと思いました。
A：成文憲法がないんですね。
D：そうなんですよ。
B：無いの。マグナ・カルタという憲法じゃないざっくりとした…。
A：あれはなんなんですか？
B：あれは大憲章といって、もうちょっと憲法よりも抽象的っていうか。あれに縛られて、それによって法律をつくっているわけじゃない。法学分野でもイギリスってめちゃ面白んですよね。
A：へ〜。そうなんだ。
B：ドイツは逆で。日本と同じで、成文法だから。その逆になる。成文法だと「解釈」になるんですよね。
A：高校生の時に勉強したことあるな…。
B：コモン・ローの場合、そもそも解釈しかないという前提ですもんね。
D：ワイマール憲法って、最高の憲法だったんだけど、その憲法で合法的にナチスがつくられてしまった。
B：そうそう。
D：そんなことがあるじゃないですか。イギリスはそもそも、最高の理念みたいなものを、信じていなくて。懐疑主義というか。そういうのがあるなと思いますね。
A：それってまさにユートピア。トマス・モアのやりたかった『ユートピア』を提示する意味ですよね。面白ーい。
B：そもそも、これは 1500 年代だから、共産主義とかいう発想は全然ないはずですよね。
D：ないですね。
B：でも、内容はそんな話があって。だから、共産主義って明確に言われていなくても、こんな時代からそんなことを言っている人がいるんだなっていうか。いたんだなって改めて思いました。社会主義、

共産主義とかっていうこと、まさにフウイヌムってそういうことですよね。
D：はいはい。
A：今の話とも繋がりますが、魂と肉体を比較しているじゃないですか。快楽のところで。魂＝精神じゃないかもしれないけれど、1500 年代はじめに、キリスト教的なことは当然すでにあるから…。
B：でもデカルトの前ですよね。
A：その辺り、気になるところです。あまりわかっていないのですが、グノーシス主義っていうじゃないですか。肉体をよくないものと捉える。
B：善悪二元論ね。
A：そういうところから影響を受けているんだろうけど、「デカルトより前なのにな」って思って読んでいました。
B：そういうものって、大陸とイギリスを比較すると、大陸ではできなかったんじゃないですか？（イギリスでは、）大陸でいうカトリックの主義に合いそうにないものも、理性的に考えてどうかということを考えられた。でも、トマスモアってエラスムスと同じく人文主義に分類されていて、理性とカトリックの教義とが矛盾する場合には、教義を取るっていうスタンスだったんだって。そもそも、大陸の人たちって、理性とかいうことよりも、カトリックの教義の方が強かったんじゃないかな。イギリスはちょっと距離もあったし、はすに眺めているっていうか。っていうところから、文学としては先にイギリスからそういうのが出たのかなって。デカルトはフランスですよね。その後だもんね。ガリレオは…。どこだ。
D：イタリア？
A：ローマ。
B：イタリア。そうだそうだ。そう考えると、イギリスの方が進んでいたのかもしれないよね。
D：イギリスは知のあり方が大陸とずいぶん違うというのはよく言われますね。
B：ジョン・ロックとかも全然後ですよね。
A：それはシェイクスピアを読んだ時にも結構思っていて。シェイクスピアは明らかに精神と肉体を分けて考えている。「…だよな」と思いながら、近代前夜。これまで、そんなことを考えていたので、今のはスッキリする話でした。
D：面白いですよね。島国っていうのもありますよね。地勢的に。
B：そうそう。
D：中国の儒教の古典って、日本に来ると変な発展をしますよね。そういうのとも似ているなと思いますけどね。デイヴィッド・ヒュームというイギリス経験論の大家がいます。ルーツになっているような人がいて。その人の有名な言葉で、「今日太陽が昇ったからといって、明日昇るとは限らない」というものがあります。明日昇ったことを見るまではわからないということです。徹底的に懐疑しているわけです。
B：懐疑ね。ふふふ。
D：いわゆる原則みたいなものがあって、そこから演繹するということを拒絶するんですよ。現実を見て、帰納的に考えていく。そういう方向しか彼らは認めない。それが、コモン・ローにもなっていく。そういうことだと思うんだけど。
B：その、デイヴィッド・ヒュームの影響を哲学的に受けた人がカントなんですよね。

D：へ～。カントって、フランス人？
B：ドイツ。ドイツ人。だから、ドイツ啓蒙主義、ドイツ観念論ってあるじゃない。あの辺って、イギリス経験論の影響を受けて、いわゆる理性みたいなものをどう捉えるかっていう話になっている。だから面白いよね。はすに見ていた側の影響を受けて、大陸合理論側が変わっていく。
D：往復運動はあるよね。
B：でもイギリスは、その後もずっといわゆる懐疑主義、経験論的なものを引き続いてもっていき…。
D：あると思うよ。
B：だから数学とかね、そっちがイギリスでは盛んで。でも文学においても、ジョージ・オーウェルなんかを見ると、何百年前と同じようなスタンスで、作家が書いているんだなって思う。
D：実は、究極的には、ブレグジットとかも、そういうところも関係しているんだよね。多分。EU って観念の共同体なんですよ。いわゆる民族とか言葉の違いとか、そういう、土とか、血とか、そういったものと乖離したところにある理想でまとまろうという話だから。そういうものって、イギリス人の本性に、そもそもフィットしていなかったという可能性がある。っていうのはありますね。
B：そういうと、E さんどうなんでしょうか。宗教でずっと争いが続いているじゃないですか。そっちの争いもずっと続いているじゃないですか。あっちの方が観念の共同体をつくろうとして、統一しようとしているよなと思うんですけど。
E：私は難しいことはあんまり考えていなかったのですが、イギリス人と、友達として付き合っていると、結構観念的だと思うんですよね。
B：あー。
E：ビジョンとか、ミッションとか、そういうものをすごく大事にしている。でもすごく現実的で、とは思うんですが、島国的な特徴はすごくあります。EU に対しては、メリットがあるから入っているというだけで、共同体みたいなつながりはあんまり…つながりを感じている人はあまりいなかったよな、と考えながら聞いていました。
B：でも、今回、みなさん抜けた方がメリットがないとわかっていたにも関わらず、賛成した人がある程度いたってことなんじゃないですかね。
E：年齢が上の方は、ですよね。若い人たちは、ブレグジットに反対派が多かったですよね。
B：あ～。
D：うんうん。
B：そっか、いわゆるイギリスでも、イギリスであっても、ナショナリズムみたいなものがある程度強くなっているんでしょうか。
D：うんうん。
E：結構世代によっての違いが大きかったのかなって。
D：うんうん。
B：それってアメリカも同じっちゃ同じか。うーん。
A：時間もそろそろですが、イギリス文学もお腹いっぱいですね。
B：結構前からお腹いっぱいでした。
D：うんうん。
C：ははは。

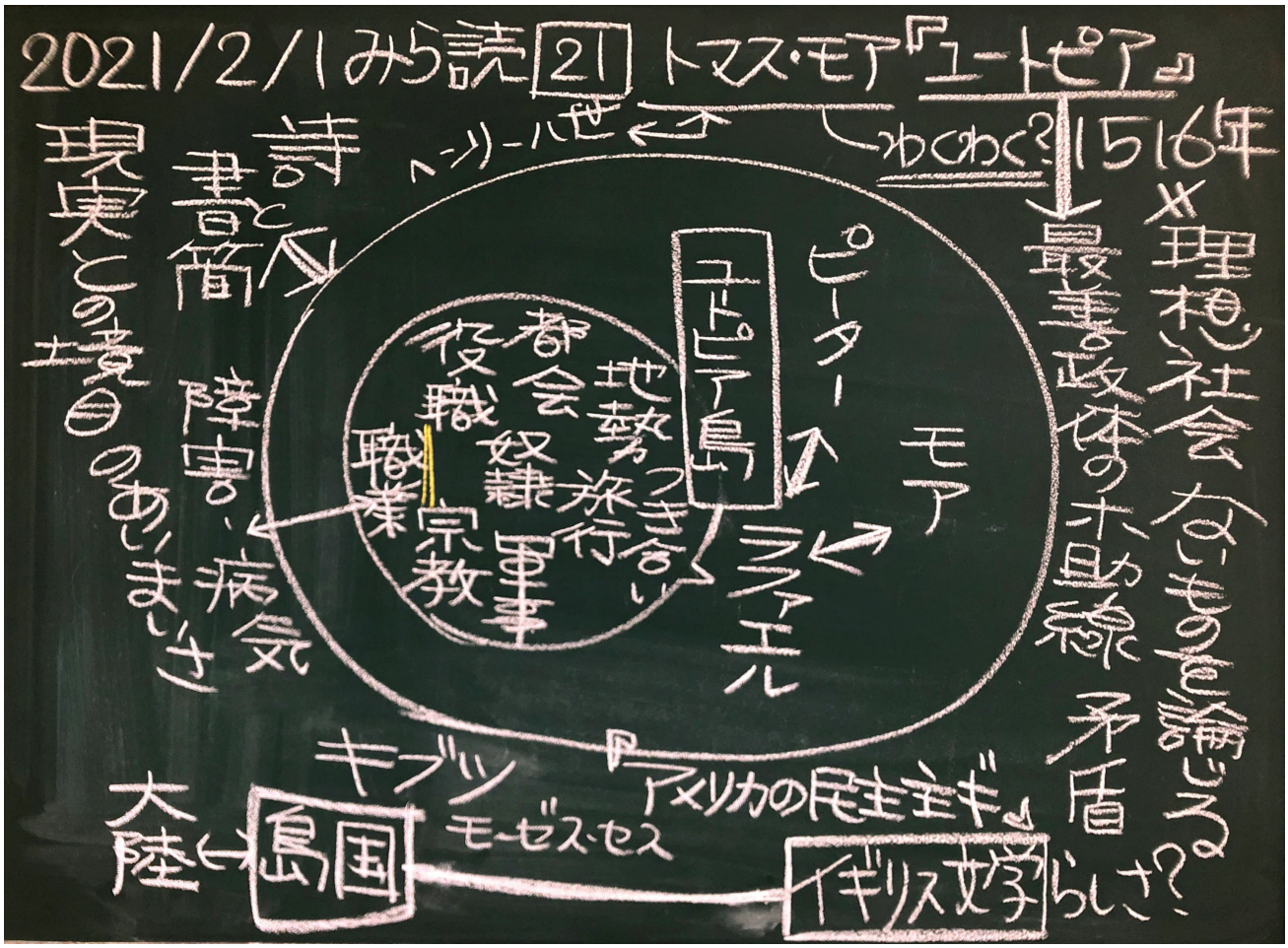
B：何作続いたんですか？イギリス文学は。シェイクスピアからだから…。一回出た？
A：一回出たんだけど、アンデルセンで。
B：アンデルセンを挟んでいるのか。
A：でもクリスマスで戻ってきたんですよね。
B：はっはっは。
C：そう。まだヨーロッパにいようって。
B：そっか、ディケンズで戻ってきちゃったのか。なるほど。それくらいイギリス文学ってすごいんだって思わない？
D：すごいと思う。
A：うんうん。
B：こんだけ続けて読めるくらい。なかなかイギリスから抜け出せなくなるくらいってことですよね。
E：はっはっは。そうですね。
A：抜け出せなくなりましたね。
E：そんなに。
B：そんな、抜け出したくなるあなたに。
A：いやいやいや。
C：ははははは。
A：その話かなと思いましたけど。
B：『闇の奥』、これはすごく薄いです。まだ読んでいないんですけど、ジョセフ・コンラッドという、元々はポーランド人、ウクライナ生まれのポーランド人で。その後ロシアでお父さんが捕まったりして生活できなくなり、フランスに渡って船乗りになる。その後、イギリスの船乗りになって、イギリスからアフリカ大陸とかに何度か行った中で、いわゆるアフリカに対する帝国主義的なヨーロッパ諸国の色々なやり方を見る。見たものを元に書いたという本なんです。薄いんです。色々な訳があるから。
C：どこの国って言いましたっけ？
B：イギリス文学にまとめられているんだけど…。
C：結局イギリス？
B：でも、この話の中はアフリカの話なんです。
C：あー。
D：うんうん。
A：今、ちらっと調べたら、イギリスからアフリカに向かう話なんですね。
C：そっかそっか。
B：イギリスからアフリカに向かっていった人、船長さんがイギリスに帰って、その人の話を聞いているって話です。
C：はっはっは。
B：やっぱり、あれなんです。手紙の話と似ていて。
C：手紙みたいな。
B：直接的なストーリーではないんです。でも、途中まで読んだんだけど、やっぱりめちゃくちゃ面白いです。

A：何年に書かれているんですか？
B：これは 1900 年とかじゃないですか…。
C：最近ですね。
B：割と最近。
A：最近って。
C：さっきは 1500 年だったから。
B：1899 年。ちょうど 1900 年の直前。
A：あ～。
B：大陸で言うとニーチェとかです。これは素晴らしい。多分面白い。そして、次はこれ…（『やし酒飲み』）。
C：はははは。
D：はいはい。
A：満を辞してアフリカに行ける気がします。
B：昨日、『やし酒飲み』をもう一回読み始めたんですよ。もう、最高です。
D：へ～。
B：もう懐疑とかどこにいっちゃたのって感じです。懐疑してたらもう全然無理。
A：はっははは。
C：へ～。
B：え～！みたいな感じです。ベースとなる文化が全然違う。
D：うんうん。
B：なんか、マジックリアリズムって言うんだって。なんか、死者の国と生きている人の国を行ったり来たりとか。
D：あ～そういう話。
B：訳がわからない。そういうのが突然出てくるけど、突然終わって、あの話どこにいったのってなる。バルガス・リョサとかに引き継がれているんだって。
D：何？バルバ…？
B：『百年の孤独』とかね。だから、ラテンアメリカ文学に、結構こういうアフリカの文学、影響を及ぼしているらしい。だからその後アフリカに行くのにちょうどいいですよね。違った、ラテンアメリカか。なので、抜け出すために。
A：じゃあそれにしますか。
B：じゃあこちらで。アフリカで味わっていただくのはこちら。
E：面白そうです。
B：やし酒、最高ですよ。
E：すごく面白そう。
A：『やし酒飲み』、オーディオブックありますかね。
E：どうでしょうね。
B：わからない。
E：調べてみます。

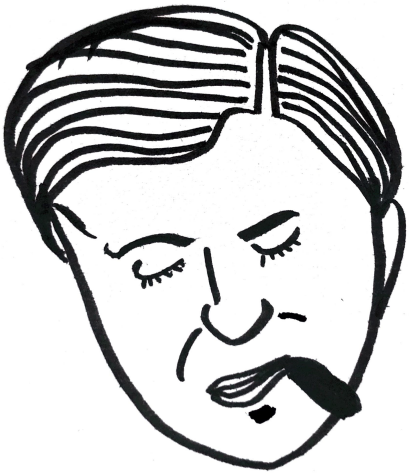
C：確かに。
B：確かにね。ですます体と、である体がめちゃくちゃなんです。訳者どうしたの、と思うけれど、元々がそうなんですって。
A：いい訳ってことですね。
D：忠実に訳しているんだ。
B：多分。
A：では次は『闇の奥』にいきましょう。
B：コンラッドね。
D：うん。
B：これはオーディオブックで Youtube でありました。ハートオブダークネスという。
C：英語ってこと？
B：オーディオブックはね。
C：そっか…。
B：日本語のオーディオブックを探していないから、わからないけど。これは薄いよ。
C：じゃあ…。
B：薄いといっても 200 ページくらい。
C：あ～。
B：この光文社古典新訳文庫の訳は読みやすいです。
C：あー。
D：はいはい。
B：でも岩波もあるよね。
A：ありました。日程を…。前回、二週間に一回はスパンが短いっていう話もありましたね。
B：やっぱり読み切れないよね。話が長いと。
A：どうでしょうか。
B：3～4 週間空けた方が、C さんも読み切れるかもしれない。
C：なんですか～それ。いかに楽をして読むかを考えています。
B：楽をするのはいいんだけど、読み切れないとね。
C：確かに。
A：ではその都度、厚めの本の時は…本の厚さによって変えていくっていう。
D：いいと思います。
B：いいと思います。
C：うんうん。
A：いつでも短い本っていうよりは、今回くらい、『ユートピア』くらい厚い本はチャレンジしたらいいときあるかもしれないですね。
…
A：では次回は 3 月 1 日の 16 時～お願いします。
B：録画で見たいという声が多数なので、Youtube で。多分大丈夫だと思うんですけど。録画で。
D：大丈夫ですよ。

B：本を読みたいけれど一歩踏み出せない人が多いみたいですね。
C：わかります。なんだか目が疲れる。
A：はっはっは。
D：ふふふ。
B：みんな言うね。
C：なんか目が疲れるの。なんか。老眼と乱視…同じところを二回読んでたりして。あれっと思う。
B：老眼はね。D さんも来ているでしょ？老眼。
D：いやー僕はまだ。いつきてもおかしくないけど。
B：えー。僕はもうこのくらいです。これはもう無理です。
C：すっごいわかります。
B：だから、食べ物が美味しくないんです。口の近くで食べるものありますよね。味噌汁とか。自分の食べているものが見えないんです。こんなにつらいんだって思う。
D：そっかー。
B：じゃあ『闇の奥』で。面白いと思います。
A：個人的なので言うと、今年度二週間に一度という読書会、私個人的には、なんというか、経験値がアップしたような気がしていて。
C：うんうん。
A：あの、それも世界文学にチャレンジしているっていう、感じが。
B：本当ですよね。
A：私的には二週間に一度のトレーニングみたいになっていて。心地よいので。1 ヶ月に一回と言わず、できれば二週間に一回で…。
C：ははは。
B：ふふふ。長さによるよね。
C：いやなんだべさー。いいなよー3 月 1 日いやですって。
B：はっはっは。
A：時々、1 ヶ月に一回とかにしてくれたら。私としては嬉しいです。
C：素直に言いなよ。
B：じゃあ三月はもう一回、『やし酒飲み』で行こうよ。
D：長いことで、長尺の本を読めるっていうことあるからね。二週間という制約があるから、割と短めを選び続けてきたので。そういうギアをシフトするっていうのもありですね。
A：確かに。それはそれでいいトレーニングになりそうですね。
B：はいはい。みなさん『やし酒飲み』も買っておいてください。
D：『やし酒飲み』は読みたいね。
C：読み終わるまでずっと勧められそうだから。いつか通らなきゃいけないんだなって。
A：年度で区切っている訳じゃないけれど、私たちの年度納めは『やし酒飲み』、いいかもしれないですね。
C：確かに。そうだ。
A：『変身』から始まって、『やし酒飲み』で終わる。

E：そっか、『変身』からだったんだ。
B：見える化したやつを共有してよ。
A：では終わろうと思います。ではまた。



ジョセフ・コンラッド
『闇の奥』

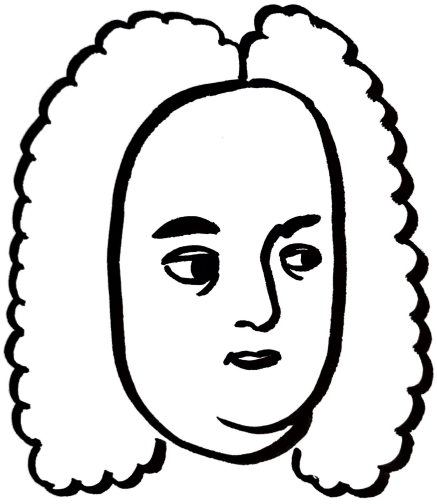


カレル・チャペック
『ロボット R.U.R』

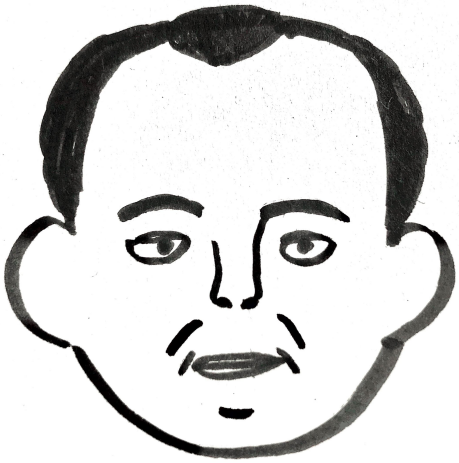
トマス・モア
『ユートピア』

古典を読む。
世界を旅する。
みらいをつくる。

ジョージ・オーウェル
『動物農場』



ジョナサン・スウィフト
『ガリヴァー旅行記』



サン・テグジュペリ
『星の王子さま』

Designed by E